
SHORT CUT MIX

立川寿限無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S H O R T C U T M I X

【Nコード】

N 4 4 2 3 R

【作者名】

立川寿限無

【あらすじ】

奇妙奇怪奇天烈短編集。

傷だらけの天使

2年の伊藤が高校一の美貌を持つ桜井と付き合い始めたという話は、もう知らない者はいない。話が流れた当初は、学校中が驚愕の渦に包まると同時に、多くの生徒が落胆していた。

彼女に一目ぼれした後輩たちや、彼女が入学した当事から狙っていた先輩たち。その数は全男子生徒を占めるほどの割合だった。

彼女は女生徒からも人気が高く、その性格から後輩先輩を問わず、多種多様な人物と深い交友関係にあった。また、その成績から、担任教師は勿論、教頭や校長からも一目置かれる存在として、2年で生徒会長に任命され、学校の行事に大きく貢献していった。

多くの男たちを魅了し続けた「桜井佳奈子」が、学年でも目立つ事のなかった、ごく普通の同級生、伊藤と付き合い始めたのは、高校2年生になって初めて春を向かえる頃。

桜井と伊藤が付き合いつきっかけとなったのは、1年の時。偶然同じクラスになり、親しくなったのがきっかけだ。周りからは「伊藤と桜井が仲がいい」という印象を与えていたが、「付き合いしている」という噂は立たなかった。

桜井は多くの男子ファンを持つが、親しくなることはなかった。桜井自身が突き放している訳ではなく、ファンの方が桜井を雲の上の存在として扱っているらしく、近付こうとはしなかったのだ。それも男子生徒に限ったことではなく、女子生徒もこの頃は近付かず、いつも桜井は孤独の中にいた。

人気はあるが孤独という矛盾の中、伊藤が現れた。彼は他の生徒と違って、気軽に桜井に話しかけた。今まで暗闇に閉じ込められた桜井の心に、一筋の光が差し込んで来たようだった。

桜井は伊藤に惚れ、自分の伊藤に対する気持ちを打ち明け、付き合い合うに至った。

伊藤も桜井と付き合い合っていることで毎日、優越感に満たされてい

た。あの日、ただ普通に喋りかけただけで、高校一の美少女と付き合う事になるとは、思ってもみない事だった。いつも二人並んで廊下を歩くだけで生徒たちが振り返る。今まで誰からも注目されることなく、ただ影の薄い日々をのんびんだらりと繰り返していたのは、もう過去の事。今は誰もが自分の名前を知っている。伊藤は180度変わった世界にとても満足していた。

付き合ってから2ヶ月がたったある日、伊藤の携帯が震えた。

<今日、お時間があれば、私のお家まで案内しますので、保健室の前で会いましょう。お話したいことがあります>

受信ボックスには桜井からのメールが記されていた。伊藤は桜井のやけに改まった口調の文に少し不安を覚えた。

(話ってなんなのだろう……?)

保健室で待っていた彼女に案内されたのは、小さなマンションの3階にある、「304」と書かれた部屋だった。

「入って」と、桜井は入口を開けると、伊藤を部屋の中へと誘導した。桜井は一人暮らしのようだが、伊藤の一人暮らしと違って、散らかっておらず、入っただけで、とても心地よく伊藤は思えた。

続いて「座って」とソファを手で指し示す桜井。先程から短い文で伊藤を誘導していく。言葉数の少ない桜井を見ていて伊藤もどこか落ち着かなかった。

ガラスのテーブルを挟むように並ぶ黄色いソファに腰掛けると、すぐにテーブルに一人分のクッキーとオレンジジュースが無言で置かれた。

「桜井は食べないの?」とは聞くと「いい」と即答された。どこか空気が重々しく感じて、どうも食べる気にはならない。伊藤はただソファに座って、彼女からの「話」を待つしかなかった。

「伊藤くん」

不意に呼ばれ、伊藤は顔を上げた。いつの間にか向かい合う、もう一つのソファに座っていた。表情はどこか暗い。伊藤は話しかけようとしたが留まった。しばらくの沈黙が続いたが、それを破っ

たのは、やはり桜井だった。

「あの『話』なんだけど」

「うん……」

重苦しい雰囲気は変わらない。伊藤は向かい合う桜井の目を見れなかった。桜井の語気は勢いがあるようにも思え、彼女の気焰に圧倒されるような気がして、今度は伊藤の口の動きが弱まった。いたい「話」とはなんなんだろう。伊藤はその「話」に対して厭な予感しかしなかった。

「私ね……実は整形してたんだあ……」

伊藤はその一言に衝撃を受け、顔をあげた。ここで初めて彼女の目を見た。吸い込まれるような眼差しに背中に悪寒を感じる。懐かしむように彼女が口した「整形」という事実。つまり彼女の美貌は天性のものではないのだ。

沈黙の伊藤に彼女は構い無しに話を続けた。

「昔ね？私こんなじゃなくて、もっと酷い顔だったんだよ？」

下を向く伊藤は桜井が自分に対して微笑かけているように感じた。「みんなからは『化け物』とか言われて……今でもホント、思い出したくないんだけど、伊藤くんには話そうと思って……」

声のトーンを落としてまた沈黙が続いた。桜井は伊藤の返答を待っていたのだ。沈黙の中、ここで自分は何をいえばいいのだろうか。伊藤は煩悶すると、ようやく口を動かした。

「なんで……俺に話したの？」

「そんなの彼氏だからに決まってるじゃない」

桜井は俯いたまま聞く伊藤に即答した。桜井はまた話だした。

「このことを言ったのは貴方だけよ？貴方以外の人達は何も知らない」

桜井はいつの間にかソファを立っていた。伊藤は彼女の言葉に少し疑問を覚えた。「貴方以外の人」とは親も入るのだろうか。そんな筈はない。さすがに親には告知してるだろう。だが伊藤は「親には言ってるよね」と聞いてみた。下がった頭は上がらないまま。

「言っていない。私が整形したことなんていえない……」

声のトーンが下がりどこか悲しさが窺えた。言っていないとは言っているが、必ずバレる。彼女の話からすると、過去の顔は今の顔とは全く別のようだ。自然と顔を見ればバレるだろう。伊藤は顔を上げて、思ったことを言葉にした。

「でも、顔を見れば分かるだろ？」

「だから顔を見せてない……だまって出て行ったの……」

言葉が異様に重い。伊藤の背中にならずしりと重くのしかかって来る。彼女と会話していると押しつぶされそうな気持ちだった。伊藤は桜井が考えていることが分からなかった。そんな大事なことを何故自分に伝えてくるのか。彼女は「彼氏だから」と言っていたが、伊藤としてはそんな深い関係を築く気は更々ない。高校卒業まで「学年一の美女の彼氏」という地位に存在していれば満足であった。

桜井の気持ちに日々同情していたら無駄に関係が続くことになってしまう。こつちとしては高校生活終了と同時におさらばしたいというのに。「早く適当に話済まして帰ろう」と伊藤は考えていた。

「15歳のころの話……」

桜井が呟いた。もう2年も一人暮らしをしているのだそうだ。当時中学生の彼女が整形して、一人暮らしをする。この疑わしく思うも無理もないほどの衝撃の事実。伊藤は身を硬直させて静かに驚いていた。

その呟きから長々と沈黙が続いた。あまりの長さに伊藤は耐え切れなくなり、口を開こうとしたが、桜井がまた話だした。

「名前も……本当の名前じゃないんだあ……」

伊藤は目を見開いた。彼女の眼差しは過去を懐かしむように遠くを見据えていた。

「桜井はそのままなんだけど、名前は佳奈子じゃなくて『奏』っていうの」

伊藤は何も返答できなかった。彼女の口からは信じられないような事が次々と飛び出してくるが、訝しい感じは不思議としない。信

憑性は全く無いが、彼女の語気は「真実」を孕んでいるような気が伊藤はしていた。

しかし、伊藤は分からない。何故桜井は自分にこんな事を言うのか。

「でも……よく、誰にもバレないでやってこれたな」

伊藤は言った。すると桜井の表情が緩み、微笑んだ。

「バレないでやってこれる訳ないよ。何十人の人たちにバレちゃった」

「バレてどうしたの？」

今となつては伊藤は何故このような事を聞いてしまったのだろうと後悔した。彼女にとって「それ」は生涯誰にも知られてはいけない秘密であり、それがバレると、圧倒的不利な状況に陥る。弱みを握られるからだ。

しかし、彼女は違う、弱みを握られることはなかった。

「殺した」

桜井は一言、はっきりと言った。水をうったような沈黙が流れた。「え？」

「殺したの。みんな。私の過去を知った先生や友達。みんなみんな彼女は微笑んでいた。目は深く沈んだ色に変わっているように見えたのは、空が雲に覆われ、夜になるうとしてきたからだろうか。

伊藤は霹靂を感じた。雷が身に落ちるような恐怖に硬直した。

クスクスと微笑む彼女はまるで「夜叉」のようだった。

(殺される……)

そう思った瞬間、桜井が口を開いた。

「黙っててくれたら、殺さないであげる」

桜井は出会った時のように、やさしく微笑んだ。

彼女は弱みを握られることはない。彼女は恐怖で人を手に入れる。恐怖で束縛する。恐怖で愛を語る。

伊藤は自分はもう彼女からは逃げられないのだということを知ると、徐にうなだれた。伊藤の目が沈んだ色に変わっているように見

えるのは、空の色の所為ではなかった。

トラウマ

僕が……そうですね……高校生の時でしたかね。それも1年生。僕は、友達とデパートに行ったんですよ。なにか買うでもなしに、彼女のいない同士、予定も未定のままで行ったわけですよ。

そのデパートは結構大きくてですね、スーパーや、おもちゃ屋、ブティックなんか沢山並んでいたわけで、それが理由なのか、人も多かったですね。子供から老人まで、色々な人たちがそのデパートに集まっていました。もの凄い雑踏でした。

その雑踏の中を、僕と友達、二人でふらふらと歩いてたんですね。そしたら小さい子供が、よちよちと、走ってきたんですよ。

僕はその子供が近づいてくるのに気づいてたんですけど、そのとき、友達は気づいてなかったんですね。避けることなく、ぶつかってしまいました。

友達は背が高く、走ってきた子供と、大分身長に差がありまして、子供は身長は友達の膝ぐらいの高さしかなかったんですね。子供は、友達の足にぶつかって、後ろに吹っ飛んでしまったんです。

困ったことに、その子供がワンワン泣き出すんですねえ。しかもその後、その子の母親と思しき女性が、やってきたんですよ。

これは謝らないとな、と思ったんですが、ぶつかったのは僕ではない訳ですから、友達に「おい、謝っとけよ」囁きました。

その時、ふと友達の顔を見上げると、唇が震えていたんですよ。「おい」と声をかけると、今度は唇だけじゃなく、全身がガタガタと震えだして「うわああああ！」と叫びだしたと思ったら、号泣しだしたんですよ。

それはもう、驚きましたよ。いつも物静かな友達が、大泣きしている子供を前にギャーギャーと泣いてるんですから。しかも、自分の顔を両手で掻き毟りだしたんですね。凄い勢いで。

もう子供もその光景を前にして、ポカンとして泣き止んでいまし

た。お母さんは「どうしたの？この人、急にどうしたの？」僕に聞いてくるんですよ。そんなもの分かるわけ無いじゃないですか。お母さんもテンパっていました。僕もそれ以上にテンパっているわけですよ。テンパっているどころじゃ済んでいない友達を前にして僕はとにかく、彼の激しく動く両手を押さえました。すると、次第に泣き止み、過呼吸になりながらも、なんとか落ち着いたわけです。

後から僕は友達に「なんであの時、あんなに泣いたんだよ」と聞いてみました。すると友達は「俺には小さいときのトラウマがある」と言い出したんです。僕はさらにその「トラウマ」について聞きま

した。

すると「俺が、親と一緒にデパートに行ったとき、妙にテンションがあがっちゃって、走り出しちゃった。」と。「そしたら、男の人の足にぶつかった」「たぶん、俺は面倒くさいことに大泣きした」「そしたら泣いている俺より、ぶつかった男の人が、号泣してた」「しかもその人、ものすごい勢いで自分の顔を、引っ掻いている」「もう一生忘れねえわ」と言ったんですね。不思議なこともあるもんだなあと思いました。

すると、たぶん、友人のあの姿を見てしまった、ぶつかった子供も、同じトラウマを抱えることになるんですかねえ。

あと友達は「めっちゃくちゃ顔面ヒリヒリすんだけど」って笑っていましたね。少し記憶障害も出ているようでした。

あれは今でも忘れられませんね。

ギサ婆

今から60年も前の話だ。

当時俺が7歳の頃、夏の日、同い年の従兄弟の『祐介』に会いに、両親と里帰りに行った。俺と両親は、そこで7泊8日の旅行となった。

東京とは違って、空気がおいしく、綺麗な緑の大きな山がならぶ田舎で、俺はそれが珍しくて珍しくて、毎日、祐介と一緒に遊んでいた。

「なあ、『ギサ婆』って知ってるか？」

ある日、一緒にカブトムシを取りに行っていると、祐介は突然そんなことを言ってきた。

「なんだ？『ギサ婆』って」

俺が祐介に聞くと、祐介は捕まえた大きなカブトムシつまむと、様々な箇所を舐め回すように見ながら言った。

「行ってみる？『ギサ婆』のそこ」

祐介は「行けばわかるから」と俺をせかすと、山奥に通じる獣道のようなところを進みだした。こういう石ころだらけの道は通ったことないので、俺は何度もこけそうになり、祐介のペースにあわせるのが必死だった。

息をきらしながら祐介の後を追っていると、目の前にボロボロの家々が立ち並ぶ風景が見えた。

「ここか？」

息切れが激しい俺は、しぼりだした言葉がこれだった。そんな俺を心配することもなく、祐介は走り

出し、坂を滑り降り、麦畑の中に姿を消した。

俺はあまりのスパルタに祐介について行けなくなり、見失ってしまった。

「おおい、ここー！ここだよ！」

祐介は戸惑っている俺に向かって、麦畑の中から手を降って、自分の現在地を示した。

俺は自分の背の高さぐらいある麦を描き湧けて祐介に近づくと、祐介は「見るよ」と前方を指差した。

前方には、縁側で黒ネコを撫でている、しわくちやの老婆がそこにいた。

「もうちょっと近づいてみようぜ」

好奇心に駆られた眼差しで、祐介が進み出した。俺も祐介の後を追いつき進みだすと、祐介が腰を落とし、麦のすきまから覗きだした。

俺も祐介のとなりで、同じ行動をとった。

「あれが『ギサ婆』だ」

祐介は『ギサ婆』に気づかれないように小さな声で言った。見ると、祐介は小刻みに震えていた。

「どうしたんだよ……」

俺が『ギサ婆』の方を見ながら聞くと、祐介は話した。だした。

「毎年、ここの田舎で一人子供が消えるようになったんだよ。俺は思うんだ。絶対『ギサ婆』が……」

急に黙りこんだと思い、祐介のほうを向くと、さっきまで一緒に『ギサ婆』の方を覗いていた祐介がそこに居なかった。

「え？おい……祐介？」

俺は立ち上がったあたりを見回した。しかし、祐介は見つからず、そこには麦畑に囲まれた俺しか存在しなかった。俺はそのことが理解できず、たちまちパニックに陥った。

「おい！祐介！おい！！」

突如消失した祐介に対して俺は、前方にいる『ギサ婆』のことを忘れて、あたりを見回しながら、もうほとんど泣きそうな声で叫び続けた。

その時、パツと『ギサ婆』と目があい、しばらくの沈黙が流れた。
「……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……あ……」

俺は不気味な感覚に襲われ、体が動かなくなり、目から涙が溢れ

てきた。

そんな俺に向かつて『ギサ婆』は黒ネコを撫でる手を止めると、ニイっと齒のない顔で不気味に笑みをうかべた。

「うっ、うわああ……！！！」

俺はあまりの恐怖で号泣し、一目散に逃げ出した。もうそこから先はどう逃げたかわからない。あ

らゆる疑問や恐怖が俺を包みこんでいた。

気がつくと、日が沈み、夜になっていた。俺は、両親と親戚がいる一軒家の前にたたずんでいた。

しばらくたたずんでいると、両親がやってきて「探したんだぞ！どこに行ってた！」と父親が怒鳴った。

俺は声を上げて泣くだけで、何も答えられなかった。

そして、結局、警察が出動したが、祐介は見つからず、俺は両親と一緒に家に帰る事になった。

車の中で父親と母親が、祐介について会話している中、俺が突然きりだした。

「ねえ、『ギサ婆』って何？」

その瞬間、空気が凍りつき、車が丁度赤信号で止まった。

「お前、『ギサ婆』のどこ行ったのか……」

父親は後部座席にすわる俺のほうを体ごと向け、言った。

結局、俺はそれ以上聞く事が出来なかった。

俺はその、恐怖で凍りついたような父親の表情と、『ギサ婆』あの不気味な笑みは忘れる事はできない。もちろん、日に焼け、いつも元気だった祐介のことも……。

67歳の祖父は、当時7歳の僕に、そう過去の自分の出来事を話してくれた。祖父が死んだ後も、僕はその話を忘れる事ができない。

ラブストーリーは突然に

俺は17歳の高校2年生。名前は「織田和政」。ある日俺が親戚の結婚式に、嫌々出席したとき、とても可愛い女の子がいた。髪はショートカットで目は大きく色白。スラっとした小柄なスタイル。すべてが俺の好みのタイプと一致していた。晴天の霹靂を覚えた俺は、瞬く間に恋に落ちた。

彼女を初めて見たのは、結婚式場の外で、ベンチに座ってペットボトルのコーラを飲んでいたらときだった。あまりの見た目の可愛さに思わずコーラを落してしまった。おかげで半分以上あったコーラは全部こぼれて、150円損をした。

そして2回目、彼女を見たのは結婚式が終わり、親戚たちがあつまった食事会場でまたもコーラを飲んでいたらときだった。

「声でもかけよっかな」

親戚や両親とはなれ、壁に背を凭れてコーラを飲みながら呟いた。視線の先には彼女がいる。じつと彼女を見つめていると不意に目が合った。心臓が飛び出るほど驚き、心が跳ね上がるほど興奮し、思わず顔を赤らめて目を逸らしてしまった。

心の中で「ヘタレか」と自分を罵り、また俺はコーラを一気に飲み干した。そして俺は物凄いゲップをして、コーラを捨てるためゴミ箱に足を進めた。

コーラを捨てて、隣の自販機でペプシとコーラを購入した。コーラは、あの彼女に渡すつもり。その流れにのって会話をしようという魂胆だ。金を使わなければ初対面の人と会話ができない俺はやはりヘタレ。

「コーラいる？」

俺は手を洗っていたのか、ハンカチで手をふく彼女にコーラを渡した。生まれて初めてナンパをした気分だ。緊張で発狂しそうだった。

「あ、ありがとう……」

「うん、可愛い」と礼を言う彼女の声に俺は一人納得する。

「君、歳はいくつ」

「え？15ですけど……」

「へえ……15かあ」

歳なんかどうでもいい。とにかく俺は彼女と友達になりたい。もっと言うなら恋人になりたい。

しかし、このどうでもいい会話から話は弾み、遂に彼女の笑顔まで拝見できた。とても可愛いかった。

明るくて親しみやすく、よく話題を提供してくれ、よく笑う。俺はそんな彼女がますます愛おしく感じた。

その時、彼女の父親なのか、「薫！」と彼女の名前を呼ぶ声が聞こえた。彼女の名前は「神谷薫」だ。

「ゴメン！父さんが呼んでるから」
手を合わせて謝ると、急いで父親のもとへ駆けて行った。後ろ姿も何故か俺には可愛らしく思えた。

ふと、彼女の父親が俺の両親に、自分の娘を紹介している話し声が聞こえた。

「紹介するよ。これが息子の薫だ」

「あら？薫君？女の子みたいね」

「ああ……実に女の子みたいだ……」

俺は半分以上あったペプシを落とし、全部こぼれてしまい、150円損した。

「む……息子って……男かよ……」

一人佇む俺は、彼女……いや、彼の声は笑顔は一生忘れることはないだろう。

ちなみに20年たった今でも「神谷薫」との友達としての付き合いは続いている。

パラメーター

僕が高校の受験を控える、中学3年生のときの話だ。

友達のAと一緒に放課後、居残っていた。

どう言うわけか、受験の話から『不良に絡まれたらどう抵抗するか』に変わった。

「俺は、得意の話術で何とかする」

僕は得意気にAに言った。

「お前、口下手なくせに何が『話術』だよ」

Aは僕を馬鹿にするように笑うと「俺は………」とシャーペンをくるくると回した。

「パラメーター！って叫んで、爆発する」

予想外の言葉に僕は、馬鹿らしくて大笑いした。Aも僕と一緒に大笑いした。

それから僕は、住んでいる地域の近くにある共学の高校に入学し、Aは男子高校に入学した。

違う学校になってもAとの縁は切れる事なく、メールや電話などで連絡を取り合い、一緒に遊んだりしていた。

そんなある日、Aから「俺、クラスの不良たちにイジメられてるんだ」と、メールで送られてきた。僕は冗談で「パラメーター！って叫んで、爆発すればいいじゃん」と送った。

しかし、その冗談が通じなかったのか、Aからの連絡はそれから途絶えてしまった。

「謝らないとな………」

二階にある、一人部屋のベッドで寝転がりながら、そんな事を考えていると、一階から母親の呼ぶ声が聞こえた。その声には驚愕の様子があがえた。

「なに？」

僕が二階から降りてくると、母親は真っ青な表情で「これ………」

・」とテレビを指差した。僕もそのテレビを見た。
ニュースだった。

「東京都 市××区のS高校の教室で小規模の爆発がありました。この爆発で11人の生徒が死亡。教員を合わせて20人が負傷しました。爆発の様子を見ていた生徒に話を聞くと、虐められた1人の生徒が突然なにかを叫び、爆発したと意味不明な供述をしています」

キャスターは淡々とニュースを読み上げていた。

S高はAの通う男子校だった。11人の生徒の中にはAの名前も入っていた。

夜

夜、西村家のインターホンが部屋に響いた。

「はい」

夫は残業で帰ってこない。息子は友達の家に行っている。西村由理は返事をする、玄関に向かった。扉を開ける。

瞬間、由理は悲鳴を上げ、腰を抜かしてしまった。由理の目の前には血だらけの10歳ぐらいの少年が突っ立っていた。

少年の目からは涙のように血が流れ、顔中は裂かれたような傷で埋め尽くされている。顔色も悪く真つ青で、服はビリビリに破け、そこからも大量の血が溢れて、玄関を濡らしていた。胸には星型の黄色いバッジが着いていた。由理はそれに見覚えがあったが、恐怖が起因してか思い出せなかった。

「な．．．なに．．．．．？」

突然現れた、おぞましい光景に、由理は震えながら聞いた。少年に反応はなくこちらを見据えている。由理は恐怖に怯えるしかなかった。

「ア．．．．．ア．．．アア．．．．．」

少年は何かを言いたそうに、不気味な声を上げだし、手をこちらに差し出してきた。

「な．．．．．なによ．．．．．？」

もう一度由理は少年に聞いた。するとゆっくり少年の口が開きだした。

「．．．トリック．．．．．ア．．．．．トリー
ト．．．．．」

あ、と由理は思いだした。今日はハロウィンだ。この子はお菓子をもらいにきたのだ

「ゴメンね？今持ってくるから」

由理は部屋の奥へ行ってビンに詰められた小さいチョコレートを

2、3個とり出し、少年の元へ持って行った。ゆっくり、少年の掌にチヨコレートをのせた。

少年はチヨコレートを握り締め、くるりと由理に背を向けると家を出て行った。歩きたび、生々しいピシャピシャと血の滴る音がした。

しばらくして、夫が帰ってきた。夫は玄関の血を見て絶叫して、腰を抜かした。

「なんだこれは！」

慌てて家に入ってきた夫は、由理に聞いた。由理は少年がお菓子を買いに来たと、話した。

「そうか。そういえば今日はハロウィンだな」

そう言うと夫は高々と笑った。由理も一緒になって笑った。

「それにしても、遅いな」と夫が言った。息子のことだ。息子もハロウィンであちこちを廻っている。せつかく息子の分のお菓子も用意していたのに、さっきの血だらけの少年にあげてしまった。帰ってきたら怒るだろうなと由理は思った。

不意に、息子の気に入っていたバッジを思い出した。いつもそのバッジを胸に着けていて、星型で黄色くて……。

トンネル（前書き）

ウサメガサソヲノムルシアオニサタワラノヌリエチウサガカンオ

u s a m e g a s a s o w o n o m u r u s i a o n i s a t a w
a r a n o n u r i e t i u s a g a k a n o

（逆から読む）

o n a k a g a s u i t e i r u n o n a r a w a t a s i n o a
i s u r u m o n o w o s a s i a g e m a s u

おなががすいているのならわたしのあいするものをさしあげます

お腹が空いているのなら、私の愛するものを差し上げます

トンネル

深夜、合コンで捕まえた女を、家までおくるため、二人でタクシ―に乗った。家といっても、女の家のこと、自分の家に連れて行くなんて考えてない。わざわざ、性的関係を持つまで発展する気もなかったからだ。俺は「一時の遊び」程度にしか思っていなかった。ゆり子の存在価値は俺にとって、そんなものだった。

女は結構酒を飲んでいたが「ほろ酔い」程度だったので、意識は、はつきりしていた。

しばらくタクシ―で高速を走っていると、運転手が「渋滞ですね」と言った。

「あの、早く帰りたいんで、近道とかないですか？」

「えっと……はい、ありますけど」

「じゃあ、近道してください」

俺には早く帰らなければいけない理由があった。俺は新婚だ。妻がいる。妻には「仕事で遅くなる」と言っているが、あまり遅すぎると「どこ行ってたの？」「なにしてたの？」とか執拗に聞かれるので、変な考え起こされる前に帰りたいわけだ。

俺の隣に座っている女をさっさと家にかえしたい。しかし運転手は「近道」という俺の要件を飲めずにいた。「そうですか……でもなあ……」とか呟く運転手に俺は声をかけた。

「どうしました？」

「いえ……あの……近道の途中にトンネルがあるんですよ……」

「トンネルですか」

「はい。あの……そこを通らなければ、あなたの隣にいる人の家に着けないんですね……」

「じゃあ、通ってください」

「はい……じゃあ、一つだけ守ってもらいたいことがあるんですよ」
無駄に拳動不審というかオドオドした運転手に、だんだん腹が立

つてきた。が、あまり怒鳴るような性格でもないの。「ああ、わかりました」と極めて、自分のイライラが相手に伝わるような生返事に近い受け答えをした。

「はい、あのですね……トンネル完全に通過するまで、息止めといてもらえますか？」

「なにを言ってるんだ？このオッサンは」と俺は思った。なんでわざわざトンネル通過するだけで「息を止める」なんて面倒な行動をしなければならぬんだ。俺は「どうしてですか？」と怒鳴りたくなる気持ちを抑えて、聞いてみた。

「あの……トンネル入る直前からいいんで……」

質問に答えなかった。俺は面倒くさくなって座席のシートに凭れた。「まあ、早く帰れるんだっいたらいいか」と思って、気持ちを落ち着かせた。

ふと、隣を見ると女が眠たそうにしていた。一応、伝えておこうと思った。

「おい、トンネル入るから、その時は、息止めといてね」

俺は女に囁いた。女は気だるく「うん」と返事をした。

「必ず、息を止めてくださいね」

運転手は念を押すように俺たちに言った。

高速道路を抜け、森林に入った。真夜中の森林では、ヘッドライトだけが頼りになっており、周りは何も見えない。しだいにガードレールが見えてくると、運転手が「ここを曲がると。すぐにトンネルに入ります」と言った。ルームミラーに写る運転手の額からは、大量の汗が滴っていた。

俺は隣の女をゆすり起こした。ぼんやりとした表情から、高速道路で言ったことを忘れていたようだ。俺はもう一度「トンネルが見えたら息を止めるんだぞ」と言った。

「は？なんで？」

半笑いで、女は聞いてきた。そう聞くのが自然だと思うが、俺も理由を知らない。運転手に聞こうと思っただ瞬間、トンネルが見えて

きた。

吸い込まれるような暗闇がそのトンネルにはあった。赤みが掛かった色をしていたトンネルからは、異様な雰囲気が出されていた。俺は「とにかく入る前に息を止める」と女に言った。そのすぐ後に「トンネルに入ります」と運転手の声が聞こえた。声は震えているように聞こえた。

トンネルに入った。暗い海に落ちていくような感覚に襲われた。瞬間、何かの割れる音がして、視界が奪われた。頼りにしていた車のヘッドライトが割れたのだ。女はパニックに陥り、わめきだした。それにも関わらず、運転手は車を止めようとしなない。それどころかスピードを上げだした。

女はわめくは、車のスピードは上がり、シートに押し付けられる。パニックになりながらも、体を起こすと、なにか呟いているのが窺えた。

「だから言ったんだ……息をすると、奴らがやってくる……奴らは腹を空かしている……もう逃げるしかないんだ……ここから早く逃げるしか……」

暗闇のなかで眼を研ぎ澄ませ、耳を澄ました。運転手がほぼ泣き声で呟いている。わけが分からないが、とにかく状況が悪いことだけは分かった。運転手が言う「奴ら」も、ここまでスピードを出しているのに全く出口にたどり着けない理由も分からない。

「ねえ、どうしたの？なにがあつたの？」

女はしきりに聞いてくる。聞きたいのはこつちだと言いたくなるが、俺はとにかく息を止め続けていた。そろそろ限界だ、しかし、息をしたら何もかも終わってしまいそうな気がした。俺は目を瞑りし、シートに体を預けた。

「ああ……もう、だめだあ……全員食われる、奴らに食われちゃう……助けてくれ、見逃してくれ……死にたくない……ああ……ウサメガサソヲノムルシアオニサタワラノヌリエチウサガカンオ……ウサメガサソヲノムルシアオニサタワラノヌリエチウサガカンオ」

運転手は泣き出ししていた。最後のほうに呟いていた言葉は、もはや日本語ではなかった。何か唱えているようだった。

「だれ？だれ？なによ！なに？どこいくの？ねえ！なによこれ！」隣で女が今まで以上にわめいていた。が、だんだん声は遠退いていった。

だんだん車のスピードは速まっていき、俺をシートに押さえつける力も強くなっていき、耳鳴りが激しくなり、息が苦しくなった。

目を瞑る瞼の裏で、何が起きているかは、はっきりとは分からない。しかし、最悪の事態が起きていることは確かだった。しかし、何もできない。動くことすら叶わない。暗闇の中で、沈黙するしかなかった。

「ギイヤアアアアアアア！」

瞬間、断末魔と思うような悲鳴と共に俺は目を開けた。女性の声だった。隣にいた女だろうか。だが、確認することは出来なかった。なぜなら、俺はトンネルの前に大の字になって気絶していたのだ。なにが起こったのか分からない。まるで夢から覚めたような気分だった。

起き上がって、周りを見渡しても、俺しかいなかった。怯えていた運転手も、うろたえていた女もない。車ごと消えたのだ。

俺はトンネルの方を見据えた。どうやら、トンネルを抜けたらしい。

相変わらず、トンネルは信じられないほど暗かった。

笑い声

「佐藤って、笑い声キモイよね」

若干半笑いで女子にそう言われた。俺はもう、それはそれは酷く傷ついた。

その出来事は、美術の時間。油絵を描くのだが、美的センスがない俺にとっては、その時間は10分間の休み時間と、ほぼ変わらなかった。そんな俺は、隣で黙々とコーヒークップの絵を描いている女子に話しかけてみた。案外話しやすく、お笑い芸人の話題で盛り上がった時「杉下って『ヤンデル』の川口に似てない」という一言で思わず笑ってしまった。ヤンデルとは男二人の漫才コンビで、川口はその漫才コンビでボケを担当しているロン毛（髪の毛長い）の人間だ。彼女が「似てる」と言った「杉下」も見事なロン毛だった。酷似しすぎていたので、思わず「わはははは」と笑ってしまった。そしてこの言葉だ。

あまりの衝撃で「そ……そう？ははは……」と引き攣ってた顔でまた笑ってしまった。女子のほうは半笑いにドン引きまでが追加され、なんとも言えない表情になっていた。

「あ、ごめんね？急に变なこと言っちゃって……」

俺の動揺を察したのか、そう言ってくれた言葉が更に深く胸に突き刺さる。

「ん？あ、いいよ、いいよ。平気、平気」

「平気ってなんだ」と自分の返した言葉にツツコミを入れながら油絵を描いた。動揺をそれで紛らわそうとしていたのだろうか。案外、油絵はその時間中に描き終わった。書き込んでない分、雑になっていた。

それからというもの、ことあるごとに俺の「笑い声」に対する意見が聞かれた。どれも好評な物ではなく、ある時、友人と談笑して

いると「お前、その笑い声どうにかならねえの？」と言われた、またある時は、親に「その笑い声が原因で虐められたりしてないか？」とまで心配された。

なんだか俺はもう笑えなくなりそうだ。いつたい俺の笑い声のどこが可笑しいのだろう。自分では「わはははは」と普通に笑っている筈なのだが、相手は「ギャハハハ」と凶悪な笑い声に聞こえるのだろうか。とにかく、ムリに考えるより聞いてみた。

「なあ、俺の笑い声のどこが可笑しいんだ？」

「ん……あれだ、とにかくキモイ」

まだ聞いたのが友人だったからショックが緩和されたが、さすがにこの返答じゃ解決しようがない。そして俺は、勇気を振り絞ってあの女子に聞いてみた。あの女子と言うのは、ことの発端となった「笑い声キモイよね」と俺に言った、女子だ。そんな過去もあり、そんなに親しくないもので、話しかけ辛かった。最初にあつた時は気軽に話しかけられたのにもかかわらず。

「なあ、俺の笑い声のどこが可笑しいと思う？」

そう彼女に聞くと、大きく戸惑っていた。顔を見るなり、少し「うっ」となっていたので、俺の笑い声がトラウマみたいになっているらしい。しかし、彼女は友人とは、違う返答をしてくれた。

「佐藤の笑い声は一般的な笑い声と、月とスッポンのように違うんだよ」

「そんなに違うの？」

「うん、全く違う。とても変わってる」

「そうか……ありがとう」

「わははは」がか？「わははは」がそんなに変なのか？授業中俺はずっと考えていた。しかし、数分後、俺は彼女の言った言葉を完全に理解した。

そのときは、社会の授業だった。社会化の教師がなにか面白い事を言った。覚えていない。そんなことよりその後の皆の笑い声が頭に残って離れない。

「キエキエキエキエキエキエキエ！」

みんながみんな同じ笑い方をしていた。友人も教師も、あの女子でさえ。これじゃ俺の笑い声と「月とスッポン」の如く違うわけだ。俺はその日から笑わなくなり、一人部屋から出てこなくなった。

ホントいい一日

まったく、今日はホントいい一日だ。

友達の祐介は短距離走の自己ベストを更新したし、良哉は新しいゲームを購入するそうだし、颯人は演劇部での主役の座をゲットした。俺はそんなに主役がいいとは思っていないが、颯人は目立ちたがり屋で、奴にとっては幸福の極であろう。

「幸福の極」なんて変な日本語を使ってしまったが、それはまあ今日が「いい一日」だからだろう。気分上、頭がよく回らない。

仲の良い吉田先輩は彼女とよりを戻し、憧れの百井先輩には彼氏ができた。正直ショックだったりもするが、「おめでとう」と俺はその情報を知った後、一人トイレで呟いていた。

他にも朗報があるが、ここは控えておく。何故かなんて俺にもよく分らない。ただ控えておきたいだけ……。

人の幸せを妬むつもりはない。断じてないのだが、やはり俺は「自分」が一番のようだ。他人の幸福よりも自分の幸福。あまり認めたくない部分もあるのだが、俺の考えは「自分最高」なのだろう。

素直に他人の幸せを喜べない。逆に憂鬱になってしまう。今まで共に頑張ったり、ふざけ合ったり、励まし合ったり、笑い合った友人たちの「幸福」に俺は時間が経つにつれて、素直に喜ぶことができなかつた。

最所は「よかつたな！」と肩を叩いていたが、自然と周りが「幸福」に満ち溢れてくると、「そうか……」と言うだけだった。「よかつたな」ぐらいは言ってもよかつただろうに。更には、そいつが俺に自らの優越感を自慢しているのかという錯覚にも陥りそうになった。

自分だけが「幸福」ではない。俺は不幸ではなかつたが、何一ついいことなど起きやしなかつた。「こんな日もあるだろう」と解釈しておけばいいのに、俺はそれができずにいた。

憂鬱な放課後の教室。部活もサボってこれからどうしようかと、俺は自分の席から黒板を見据えながら考えていた。結局なにも浮かばず、俺は教室を出て行った。

「サボった理由、考えておかなきゃなんないな」

廊下を歩きながら俺は呟いた。校庭に出たらランニングをしてる部活メンバーがいるだろう。あいつらのことだ、心配して聞いてくるだろう。それで「なんとなく面倒くさかったから」なんて言ったら、あいつらを怒らせる事になる。

怒りは幸福を遠ざけるそうだ。怒ったほうも、怒られたほうも、心にずしつと何かが重くのしかかる。俺はできれば、その結果は避けなかった。

だが、メンバーに話す理由もそんなに深くは考えず、しばらく歩いていると靴箱に着いた。適当に校舎内を徘徊していた俺は、靴箱に着く予定はなかったが「このまま帰ろう」と思った。

「あの……」

のんびりと靴紐を結んでいると、自分の背中に声を掛けられた。

声色から女子だろう。

俺は靴紐を結ぶために屈んだ状態のまま、首だけを声の方向へ向けた。真後ろだったので、そんなに曲がらなかったが、声の主は確認できた。

佐野漣。彼女の名前だ。小さい背丈から発せられる声はもっと小さかった。だが、その時ははつきり聞こえた。彼女の精一杯の大きさだったのだろうか。

靴紐を結び終わると、ゆっくりと立ち上がった。佐野は大きく息を吐くと、口を開いた。

「一緒に……帰りませんか……」

彼女の声はかすかに震えていた。背中がピンと伸び、かなり緊張しているようだ。彼女の頬が赤くなっているのは、俺に確かなことは分らないが、自分が彼女の言葉に有頂天になっているのは自分がよく知っていた。

そうだ、サボった理由は「佐野と一緒に帰ったから」にしよう。
そんなことを考えながら、俺は「じゃあ……一緒に……」と出来るだ
け照れを隠したかったが、そうもいかないようだ。

まったく、今日はホントいい一日だ。

王様

誰も止める者はいなかった。

その国にはある王様がいた。彼は元々、国を守る騎士だったのだが、王が死ぬと同時に王座にあがるべきだった王の息子を毒殺し、その他親族たちを殺し屋に殺させ、だれも王座にあがるべき者がいなくなったと同時に、泣く子も黙る悪逆無道の王へのしあがっていった。

騎士が王様になつてから、かつては景気がよく、活き活きとしていた国も荒れ果てて行っていた。権力の暴走によって、民の自由が奪われ、すべての民は国のために一生をなげだす奴隷のような生活を強いらっていたのだから。だが、不満はあつたものも、王様について反発しようとする民はいない。なぜなら騎士が王様になつた後、反発していた地域の住民が一夜にして焼死体と化しているからだ。

恐ろしい武力と権力を兼ね備えた王様はさらに自らの国を拡大しようとするに侵略して行く。侵略されていった国の抵抗もあつけなく王様の手中へと加入していった。あつというまに自らの国を大国と変異させた王様は酒池肉林の毎日をおくっていた。

王様が国を治めてから10年がたった。王様はもう60を向かえ、地域の荒れ模様は悪化していくばかりであった。

ある日、王様が20人の騎士たちと中でも酷く荒れた地域に、いい奴隷がいなか出回っていたとき、少し先を進んでいた騎士たちが一人の13歳ぐらいの少女を囲い、なにやら怒鳴り付けていた。「どうした」

王様は白い馬に乗りながら騎士たちの間に割り込み、座りこんで涙を流す少女を見下ろした。すると、王様の前にさつきまで怒鳴り付けていた騎士の一人が敬礼をしようと事情を話した。

どうやら、曲がり角から飛び出してきた少女が騎士にぶつかったらしい。騎士は「貴様！民の分際で王に仕える騎士に触れるとは、

無礼な！」と怒鳴っていた。

「どうします？国王様。この者を奴隷にしますか？」

側近の男が王様に嘸くと、王様はニヤリと気味の悪い笑みを浮かべ口ひげを触った。

「いや、妃する」

その王様の言葉に側近も騎士たちも驚きの表情を露にした。とたんに側近の男が王様に慌てた様子で言った。

「国王様！なにをこんな薄汚い娘、妃などにしなくても！美しい娘なら他にも・・・」

そこまで言ったところで王様の笑い声で遮られた。側近の男の顔から血の気がひくと同時に口を噤む。

「貴様、わしに意見するのか？」

笑い声が消えたかと思うと王様は側近を睨み付けた。

「いえ・・・そんなことは・・・」

ガタガタ身を震わせ怯える側近の男の言葉を無視し、腰にある剣を抜いた。刃を動かしながらあらゆる箇所を見ると一言側近の男に聞いた。

「これはなんだ？」

「え・・・？あ、剣でございます」

「よく斬れると聞いたのだが、本当か？」

「は・・・はい」

「これを購入してからどうも信じられんなのでな」

「は・・・はあ・・・」

どうしたものかと様子を伺う側近の男に王様はとんでも無い事を投げかけた。

「試し斬りをさせてくれないか？」

「え・・・！！その・・・私でございますか？」

「貴様の他に誰がいる」

王様はしらっと答えた。

ヒィと、声を上げ、王様に背を向けて逃げ出そうとした側近の男

だったが、騎士経験のある王様の剣からは逃げられる事はなく、側近の男の首が飛んだ。

ざわめく騎士達。

王様は馬から降りると、血を払い、剣を鞘に納めた。ゆっくりと少女のもとへ近寄ると、少女の顔に手を触れ、少女の顔が良く見える様に、かかった髪を撫でるように掃った。

「見よ、これほどまで美しい顔をしている。わしの妃にぴったりだとは思わんか？」

覗きこむようにして顔を近づけたまま、王様はゆっくりと言った。確かに王様が言うように可愛らしい顔つきをしていて、密かに騎士達も納得していた。

「わしに意見するもの、逆らうもの、全員皆殺しじゃ！わかったか！！」

立ち上がると、すさまじい大声で騎士達に叫んだ。その声にビクッと反応し、騎士達は勢いよく敬礼した。彼らの脳には先ほど首をとばされた側近の男がこびりついていた。

「帰るぞ」

そう言うつと王様は馬にまたがった。しかし、少女は座りこんだまま立とうとしない。震えている。

「怯えることはない。我が城につけば、食料もすべてそろっている。もう苦しむ事も無かるぞ」

王様は高々と笑うと、騎士に少女を自分の後ろに乗せると命令した。騎士は軽々と少女を持ち上げ、王様の後ろに乗せた。少女の体の軽さからして、満足に食事もとっていないのだろう。

見上げるような巨大な城につくと、少女を風呂に入れた。その間、メイドたちに少女の衣装を用意させ、料理人たちに栄養価の高い一流の料理を作るように命じた。

新しい妃を歓迎するため城内が慌てふためいていた中、王様は騎士団の長を呼びつけた。

「なんでございましょう、国王様」

金が豊富に装飾された巨大な椅子に座る王様に、騎士団の長は軽く頭を下げ、会釈をする。横目で王様は騎士団の長を見ると、面倒くさそうに命令した。

「我が妃の親を殺してこい」

その言葉を聞くと騎士団の長は少し、深呼吸をした。騎士団の長は密かに人を殺す事に抵抗を覚えていたのだ。今まで王様の命で殺してきた数は100をも優に越える。

「いきなり連れ去ってしまったからな。後々親が文句をいつてくるかもしれない。そうなれば面倒くさいことになるしな」

王様は笑った。

「しかし・・・その親が誰だか・・・」

言葉を詰まらせながら聞くと、王様は立ち上がり怒鳴った。

「そんなもの、わからなかったら地域の民を全員殺せ！中に絶対にいるだろう。そんな誰でもわかるようなこと聞くな！！」

「し、失礼しました！」

騎士団の長は慌てて、深々と頭を下げた。王様は一度舌うちするとまた椅子に座った。

「そ、それでは今すぐ」

「ああ、さつさと行ってこい」

王様は騎士団の長を追い払うと、ニヤニヤと妃となるあの少女を手籠めにするを考えていた。

その日、少女がいた地域の民たちは一夜にして全滅した。少女の両親と共に。

静かな夜、城内は寝静まっていた。しかし、耳を澄ますと少女のすすり泣く声が聞こえる。美しく着替えた少女は、一流の料理を持って成され、その後、抵抗虚しく、王様の手籠めにあってしまったのだった。

王様の寝室の隅で、服を体に覆い、すすり泣く彼女の目の前に一人の若い男が現れた。首元から口まで赤い布で隠し、腰には短刀を差している怪しい男。

「なんだ、新しい妃ができたと思えばまだガキじゃねえか。ホント悪趣味だな」

男は赤い布を口もとから下ろすと、少女を見下ろしながら言った。少女は彼が私を助けに来たのだと思ったが、やはり見た目からそうだとはい思切れず、ただ彼を上目遣いで見つめるだけだった。

「でも、まあ、なかなか可愛いじゃん」

少女に顔を近づけると、男は納得するように言った。

しばらくの沈黙の間、男は周りに寝ている王様以外だれもいないことを確認していた。

「服、着ねえの？」

あたりを見回しながら、しらつと言った。少女は思い出したかのように、顔を赤らめ服を掴み、王様の寝床に姿を隠した。

「見ねえから、さっさと着替えろ」

少し苛立ちを見せながら男は言うつと、急ぎ足で侵入してきたかと思われる窓の方へと駆け寄った。彼の頭には、さっさと少女を誘拐してここから逃げ出そうと考え、焦っているようだ。

しばらくして、少女が戻ってきた。ドレスをととても残念な着こなしをしていた。

「よし」

男は深呼吸して、なにか決意するように呟いた。男は少女に近づくと、突然少女の顔を自分の顔と隣り合わせになるように担ぎあげた。

「うわっ！ちよ、ちよつと・・・！」

予想外の行動に、少女は彼の肩の上でジタバタと抵抗しだした。

しかし、抵抗するも余った左手で少女の口を覆った。

「叫ぶんじゃないぞ」

低い声で言うつと、侵入した窓から勢いよく飛び降りた。

ドンツ！と着地する音が城の庭に響きわたり、風が庭の草を揺らす。

突然の出来事にただ男の肩で震えるだけで声もだせなかった。男

は肩から少女を下ろすが、少女は立てず、そのままヘナヘナと座りこんでしまった。無理も無かった。何メートルもある高所から飛び降りたのは初めてだったのだから。

男は呆れた様子で舌打ちすると、少女に手を差し伸べた。少女は震えた手で彼の手をとり、立ち上がった。不思議とすぐ立ち上がることができた。

「抵抗しねえな、アンタ」

無愛想に彼は言った。さらに「助けだしたんじゃねえぞ？誘拐したんだからな？」と慌てたように付け足した。勘ちがいされていることを悟ったのだろう。

でも、彼女はそんなことどうでもよかった。とにかくここから出たかった。

朝、城内は大騒ぎだった。妃が消えたことでパニックに陥った王様はすぐに兵を出して、国中を探し回る事を命令した。が、やはり落ち着くことは無く、自ら広い城内を探し回っていた。

結局、消えた妃は見つかる事は無く、王様は半分諦め、いつも座っている王様の金が豊富に装飾された巨大な特等席に座りこんだ。

「くそっ！どこに行っただ、いつたい！！」

王様は肘掛を悔しそうに強く両手同時に叩く。

王様は自然と涙が出てきた。なにが足りなかったんだろう。自分は全てを手に入れたと思っていた。金も権力も武力も国中の人権もなにもかも。そう思っていた時、彼女に出会った。王様は気づいた。自分には「愛」が無いと。華奢な容姿に目を惹かれ王様はすぐに妃にしようと考え、昨日やっと足りなかった「愛」を受け取り、全てが揃ったと優越感に浸っていた矢先の出来事だった。

ふと、涙で滲む視界に、見覚えのある人物が写った。あの少女だった。

少女は男と逃げた後、夜、野宿をしていた。

野宿場所は焼け跡のように荒れている。それを少女は疑問に思っていた。確かに城から自分の地域へと辿りつく道のりはず……少女は男に何かこの荒地について知らないか聞いてみた。

男は眠いようで、面倒くさそうに話した。

「よくわからねえけど、大体は予想がつく。ここはお前が思っている通り、お前の両親が住んでいる村だ。あのキチガイ野郎が命令したんだろう。欲しいのは妃だけ。その妃が邪魔だったんだろうな。こうなったのは多分、両親が誰かかんねえから皆殺しにしたんだからだと思う。ひでえことするよなあ」

男はそこまで人事のように話すと眠りについた。つまり、少女の両親は王によって殺されたのだ。少女は決意した。両親の仇を討つ事を。少女は男の短刀を手にとり、走り出した。

「おお！我が妃！！」

王様は立ち上がった。その目には涙が浮かんでいる。王様は少女に近寄ると抱き寄せた。

腹部のあたりに違和感がある。力が入らない。激痛が王様を襲うと同時に、耳元で少女の声が聞こえた。

「父さん……母さんの仇……！！」

消えてしまいそうな涙声の中に憎しみや怒りがこめられている。ズブっという音と共に、握り締めた短刀が王様の腹部から抜けた。ジワリと王様の豪華な服が赤く染まっていく。

力無く後ろに大の字に倒れる王様。引きつった表情で震え、短刀を王様の傍らに投げ捨て少女は逃げ去った。

しばらく、王様は天井を見上げたままの状態だった。その時、妃を探していた城内の者たちが血を流して倒れている王様の元へと慌て駆け寄った。

「王様！如何なされたのですか！！」

白髪の男が見下ろして聞いた。

王様は一言呟くように言った。

「もういい」

「は？」

「もう、どうでもよくなった。この国も。なにもかも」

それが王様の最後の言葉だった。

それから2年もたたないうちに、王様が築きあげた大国は革命によって崩壊。新しい国が完成し、民には平和が約束された。

天国か地獄

優雅でのんびりとしている天国と比べて、今日の地獄は大騒ぎだった。なぜなら、今まで「あの世の裁判」を行って来た閻魔大王が隠居して、代わりにその息子が裁判を行うのだからだ。

「あの世の裁判」は天国と地獄の支柱のような役割を持つ。その「あの世の裁判」を行う裁判長も、天国の神や仏に並ぶ重要な存在だ。

そんな裁判長こと閻魔大王が、隠居し、その息子が「裁判長」を引き継ぐと言う事になると、地獄の「鬼」たちは、亡者を刑することと忘れるほど、今後の地獄のことについて、焦りに焦っていた。

「なんで隠居なんか為さるんだろうなあ……」

「まあ、今までこの地獄を支え続けてくれたんだ。休みたくもなるだろう」

「大丈夫かなあ、息子さんで……」

「仏は大丈夫だと言っているが……」

「大丈夫な訳ないだろう？ 楽観的で責任感が全くないみたいだし……」

「気楽で、自分勝手に、閻魔大王と正反対らしいぞ？」

「どうなるんだ？ 地獄も天国も！」

禍々しさを増す、地獄では、そんな会話があちらこちらで聞こえていた。しかも、今日は息子の初裁判の日だ。鬼達は「どんな結果になるのだろうか」という興味と「ちゃんと正当な判決を下すことができるのだろうか」という不安が同時に頭の中を占めていた。

息子が行う裁判で、判決が下るのは「同級生数人を殺害して自殺した16歳の少女」だ。殺された同級生数人は閻魔大王によって天国行きが決まっている。

「こりゃ、簡単な裁判だな」

「心配して損したよ」

鬼達は口々にそう言うが、やはり気になるのか、裁判所へ向かった。

「あの世の裁判」は「この世の裁判」と違い、弁護士や検事が存在しない。存在するのは、裁判長と被告、それと無駄に多い傍聴人だけだ。

「あの世の裁判」は人殺しは問答無用で、「地獄行き」という「決まり事」のようなものがあつた。

鬼達が傍聴人として裁判所にわらわらと集まる頃、息子が赤と青の二匹の鬼に挟まれ、傍聴人の前へ姿を現した。

「こんちわー」

気の抜けた挨拶で登場した息子は、黒いスーツを着用していた。

一見すれば普通の青年だが、これでも、閻魔大王の息子だ。スーツは閻魔大王と同じ権力を持った「サタン」から貰ったものだ。

息子は面倒くさそうに、赤と青の二匹に挟まれて法壇に座つた。

「えつと……被告人前へ」

息子は頭を掻きながら、決められたセリフを思い出すかのように言った。すると、瞬間移動でもしてきたかのように、突然、空間から高校の制服と見られる服を着た少女が現れた。

だが、息子はすぐに少女の存在を確認できなかった。息子は法壇から身を乗り出して、被告人を見下ろした。

「ぼっちゃま、落ちますよ！危ないですよ〜！」

と、息子を挟んで立っていた鬼たちが慌てふためいた。

法壇はとても高く、被告人が法壇のすぐ近くの正面にいたので、閻魔大王と違って、息子は人間と同様の背丈なので身を乗り出さなくては被告人は見えなかったのだ。

「どうも、佐々木綾香ちゃんだね？」

息子は心配する二匹の鬼たちを無視して被告人に笑顔で話しかけた。だが、被告人は暗い表情で下を向いたまま。無言だった。

「僕ね？父さんの跡継ぎとして、裁判長になっただけけど、始めての裁判なんで、結構緊張してるんだ。君も大分緊張してるみたいだ

けど、楽しんでいいよ？」

構わず息子は、人懐っこい笑顔のまま話しかける。

「今から色々聞いて行くけど、答えられなかったら、無理に答えなくてもいいよ」

被告人は下を向いたままの無言を継続させていた。

「ぼっちゃま、『地獄裁判質問説明書』です」

「だから、ぼっちゃまはやめてよ！」

息子は赤鬼を怒鳴り付けると、『地獄裁判質問説明書』と書かれた、分厚い本を受け取った。『地獄裁判質問説明書』は、被告人に対する質問が乗っている説明書だ。この場合はこの質問を言ったことが細かく書かれている。

「ん……やっぱ、いいや」

息子はそれをペラペラと捲っていくと、遊戯に飽きた子供のように、『地獄裁判質問説明書』を赤鬼に返した。

瞬間、傍聴席からどよめきが起こった。今までの裁判長、つまり閻魔大王が判決の際、必ず使用していた『地獄裁判質問説明書』を放棄したからだ。

「これじゃあ、ちゃんと判決できないんじゃないのか！」と、どよめきの中、誰かが叫んだ。しかし、息子はまた身を乗り出すと、被告人に質問した。

「ちよつといきなりだけど、君はなんで友達を殺したの？」

「……………」

「ああ……そうか、友達じゃないよね？あんなの」

被告人は息子が放ったその言葉に少し反応した。息子は被告人のその反応に細く微笑むと、また同じ質問をした。

「もう一度聞くけど、君はなんで人を殺したの？」

しばらくの沈黙。不断はざわつきの止まない傍聴席も、被告人の言葉を聞くごと、静寂を保っていた。

一瞬、「い……」と被告人の口が動いた。

「……虐められてたから……………」

下を向いたまま、被告人は答えた。その声はどこか震えていて、なにかに怯えているような様子だった。

被告人が言葉を発すると、また緊張が途切れたかのように、ざわめきが傍聴席で広がり、息子も少し安心したように溜息を吐いた。

「そうかあ……よく言ってくれたね。ありがとう」

できるだけ優しく囁くような声で礼を言うと、今まで下を向いていた被告人がゆっくりと不安気な顔を上げた。

「それと、ごめんね？この場合、被告人からの証言がないと、ちゃんと判決できないんだよ」

たとえ「この世の状況」が分かっても、傍聴人たちに決定付ける物が無いと、「適当な判決」と反感を買い地獄内で反乱が起こる事があるからだ。かつて閻魔大王も「反乱」という状況下に置かれたことがある。

亡者も人。運命を左右する「判決」はそれだけ重要なのだ。

「死ぬ時より生きている時の方が怖かったんだろう。死にたかったけど君は、自分だけが死ぬのは、虐めていた同級生が最後まで得をすることを分かっていて。だからそいつらを殺して、自分も死んだんだね。大丈夫さ。君が悪い訳じゃない。君を陥れた『人』が悪いんだ」

被告人は息子の言葉を黙って聞いていた。最所の暗い表情は綺麗に払拭されているようで、顔色も良くなっているようにも思えた。

「あの……」

被告人が心配そうに口を開くと、息子は優しく微笑んだ。

「怖いのか？言ってるじゃないか、大丈夫だって。すぐ終わるから、そんな不安そうな顔しないで？」

そう言うと息子は被告人に判決を下した。判決は「天国行き」だ。「先祖様やおじいちゃんと一緒に天国でゆっくり暮らすといいよ？でも、あそこは結構ゆったりとしすぎているから、まわりに流されて太らないようにね？」

息子は笑顔でそう告げると、今まで身を乗り出していた体勢を元

に戻し、疲れたのか息を吐きながら、法壇にゆっくりと座った。

「あ……ありがとうございます……」

被告人、いや、佐々木綾香は息子に頭を下げると一瞬にして法廷から姿を消した。

「ああ〜疲れたあ〜」

息子は首を振ったり、背伸びをしたりしながら、赤と青の鬼に横を挟まれたまま、奥へ戻っていった。息子が法廷から姿を消すと、傍聴人たちも、わらわらと法廷から出て行った。

「やっぱり閻魔大王様とは違ったな」

「ああ。いい意味でな」

「あんな、裁判、今まで見たことなかったよ」

鬼達はそう言いながら、自らの仕事へ戻って行った。

そして、法廷の裏。息子は何か、赤と青の鬼と話していた。

「虐めた側の人間たちはどうします？」

青鬼が聞いた。

「う〜ん、それは後で考えるよ。仕方ないって言い方は悪いかもしれないけど、まだ子供だったからね。天国に残しておきたいけど……また、あの子が虐められちゃったなら……」

見た目、何も考えていないようなので、鬼達に悪い印象を与えていたが、彼は彼なりにちゃんと考えているのであった。やはり仏が「大丈夫」と言ったとおり、息子は閻魔大王の跡継ぎとして相応しかったのだ。

しばらく歩いていると、息子は突然、一步後ろを歩いていた、赤と青の鬼の方に振り返った。

「ねえ、今度裁判をやるときは法壇を、もうちょっと低くしてくれない？結構、あの体勢きついんだ」

息子は顔の前で手を合わせると、上目遣いで二匹の鬼に頼んだ。

手相

ある日、銀座の「よく当たる」と人気の手相占い師の元へ、品の悪い、だらしない格好をした男が訪れた。占い師は少し抵抗はあったものも、彼の手相を拝見した。

「あー！」

占い師は思わず叫んでしまった。彼には全く手相が無いのだ。掌は異様なほどツルツルしている。

「何の嫌がらせだ」と占い師は困惑していたが、男の方は全くさつきと変わらない眠たそうな表情をしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が続く。

占い師はとにかく何か言わなければと思い、手相占いの結果を言おうとした。勿論、結果などあるわけがない。客の手には手相がないのだから。

「スター線があります」

男はそれを聞くと「本当ですかあ？」と満更でもないように微笑する。男は金を払うとすぐ出て行った。

それから何ヶ月か経ってから新聞などで「手相の無い男」が取り上げられるようになった。「こんな人見た事無い」と一般市民は彼に釘付けとなり、それをバネにして、印象の薄い男から、一躍日本の大スターとなった。

それから何年か経ち、彼は映画監督もやりだした。その事についてワイドショーが報道し始めた。

「いやあ、かつてはただのビックリ人間だった人がこうスターになるとは・・・・・・・・」

初老のコメンテーターがにこやかに話す。

「どうやら、スターになる前、彼は手相占いをしていたらしいですよっ。」

司会者が口を開き、続けて言った。

「なんでもそこで、スター線が見えるとか……」
それを聞きコメンテーターたちが笑いだす。

「両手に手相が無いというのに、どうやって手相占いが出来るんだ」

「手相占い師は、手相がなくても占う事ができるのか」

何か占い師を揶揄しているように聞こえる。

彼は元々、劇団に入っていて、スターを夢見る好青年だった。それがビツクリ人間として取り上げられ人気者となった彼は、自分の活躍場所が広くなり、世間に認められるような、時の人となった。

高い位に上り詰めるには、それなりの運と実力がある。改めて彼が教えてくれたような気がした。

心臓

日本の或る病院で、世界を震撼させるとんでもないことが起きた。始まりは「大鷹クリニック」という夫婦で経営する小さな病院での出来事。背の高い、緑のジャージを着た男がそこを訪れた。鼻水が止まらないということらしい。

院長を務める夫がその男を診察した。喉は赤く、明らかに「風邪」だった。熱は無いだろうがこれから熱が出てくる。そう思いながら、院長は男の心臓を診察しようと、男の胸に聴診器をあてた。

「ん？」

院長は首を傾げた。心臓の音が聞こえないのだ。

イヤピースはちゃんと耳についている。これはおかしい。おかしすぎる。

そう思いながら、大体の診察を終え、出す薬の説明をし始めた。しかし、どうも気にかかる。心臓の音が聞こえない。院長は一度、大きな病院で心臓を見て貰うように進めた。男は怪訝なようすで承諾した。

そして「日本帝都総合病院」という世界的有名な病院に、「大鷹クリニック」で診察したジャージの男が心臓を診察に訪れた。

世界的有名な病院ということもあり、多くの人が病院を訪れていた。

男は小一時間、待合室で待つことになった。

別の病院で心臓に異常があるという診察を受けたので「日本帝都総合病院」で再診察を受けたいということだと、内科医の「星嶋榮徳」は聞いていた。この病院で内科医を請け負って30年というベテラン医師の腕前は院長とならぶ程である。しかし、そんな彼でも今から診察する「心臓に異常がある男」にはさぞ驚いたことであろう。

「次の人どうぞ」

伸びのある、低い声は星嶋の声である。

男は無言で診察室に入り、60歳を越える星嶋の前に座った。男は星嶋の質問にある程度答えていくと、本題の「心臓検診」に移った。

聴診器を男の胸に当てると、「息吸って下さい」「吐いて下さい」と冷静に繰り返したが、心の中では、これまでにない程焦っていた。

心臓の音がしない……。

大鷹クリニックの院長が確認したように、耳に手をやった。イヤピースはちゃんとついている。

そんな馬鹿な！心臓が停止して生きている筈が無い！！

だが、まだ決め付けるのは早い。星嶋は男を別室に移動して再び心臓検診を行った。だが、結果は同じだった。どの医療器具を使っても彼の心臓が動いていることは判明出来なかった。

まさか、ここまで心臓を診察されるとは思ってた男は心配になって、自分の心臓のことを星嶋に聞いた。

「先生、こんなに検査をして、僕の心臓に何かとんでもないものがあつたんですか？」

心配そうに聞く男に「心臓が止まっている」なんて言える訳がない。星嶋は、男に自らの心臓の映像を見せた。

「……………は……………?」

イマイチ分っていないようだ。結局、星嶋は彼の心臓が止まっていることを告げた。

「ワハハハ！そんな訳無いでしょう」

馬鹿にしたように笑う男だったが、星嶋の真剣な顔を見るなり、笑い声も小さくなり、どんどん青ざめていった。自分の左胸に恐る恐る手をあてる。やはり聞こえない。

そういえば、さつきから医者たちがあつまってきたな……これは一大事かもしれない……。

それから二日後、星嶋を含め、多くの医師たちが彼の存在を公言した。すぐにその情報は首都を中心に一気に広がり、彼は世界でも「

心肺停止の状態で生活する人間」として大きく取り上げられて行った。まさか自分の心臓が止まっている事で、こうも人気になるとは思っていなかった彼。テレビ出演のオファーもとどまることを知らず、ギャラが銀行口座に溜っていく一方である。

その5年後。日本中を震撼させる出来事が報じられた。

あの「心肺停止の状態で生活する人間」が突然死したのである。

さあ、ここでマスコミが動き出さないはずが無い。

意識を失った彼を担当した、星嶋を自宅前で質問攻めをした。

「死因はなんだったんですか？」

大体の質問がこれだった。星嶋はうんざりした様子でマスコミたちを確認した。

「じゃあ……後悔しないでくださいよ？」

マスコミは星嶋にマイクを突き出す。

「死因は……」

全員が息をのむ。

「心臓発作による心肺停止です」

電話

「もしもし、母さん？」

「あら、ヒロユキ？」

「あのさあ、いい加減出してくれない？」

「え？」

「結構狭いんだよね」

「ちよっと、なに言ってるの？学校は？」

「学校どころじゃないよ、そんなところなんか行ってられないよ」

「じゃあ、今どこにいるの？」

「どっかって、母さんの足の下にいるよ」

「え？」

「だから母さんの足の下にいるんだよ！」

(ああ………そういえば「昨日、ヒロユキ殺して床下に埋めたんだっ

け………)

「ねえ、早く出してよ、母さん。」

駅から出られない

家に帰るためには、「山田駅」という、小さな駅で一度降りなければならぬ。現在時刻は午前2時と深夜だ。

自宅には妻と一人の娘が待っている。サラリーマンという仕事に就いて2年後に誕生した双子の姉妹だ。

俺『井本洋一』は、残業が終わり、やっと家路に帰れるところだった。電車に揺られながら、外を見ると真っ暗だった。空に浮かぶ満月が一層輝いて見えた。

ガタンと音がして、電車が止まる。気づけば電車に乗っているのは自分一人だった。マフラーを口もとまで上げて、俺は山田駅のホームに降りた。時刻は午前2時25分。

ホームの上には満月が浮かび、暗い筈のホームを明るく照らしてくれている。だが、寒さは変わらず、マフラーの隙間からもれる息は雪のように白い。

ホームには全くと言っていい程、人の気配がなかった。あるのは寒さと風の音も聞こえない静けさ。

俺はさつさと家に帰って、温まりたかった。いつまでもここに居る意味がない。俺は改札出口に通じる階段を下りた。

歩き続けて数分、俺は目を丸くした。曲がり角を曲がると、改札出口があるはずなのだが、そこにあつたのは、数分前に俺が降りた、山田駅のホームだった。

確かに、改札出口に向かって歩いていたはずなのだが、道を間違えたのか？そんな筈はない、仕事に就いてもうすぐ10年が経とうとしている。毎日、通るこの駅講内の道筋を間違える筈がない。

仕方ないので、また改札出口への道のりを歩んだ。満月も雲に隠れていき、駅のホームもだんだん闇に包まれて行った。

あれから、小一時間が経過したように思えた。俺は一人ホームに置かれたベンチに座り、眉間に手を当てて考えこんでいた。さつき

から、どう行っても改札出口に到着できず、結局ホームに戻って来て、ループしてしまう、という奇妙な出来事が続いていた。俺はだれもないホームを見渡すと、急に孤独と不安がのしかかった。

「山田駅から出られない……」

呟くと、ホームを照らす、もう一つの光、駅名のライトが、『ジジジ……ジジジ……』と音を鳴らして、消えて行った。もうホームは殆ど暗闇。不意に背筋にゾクツと寒気が走った。

俺は、もう一度、改札出口に向かって走り出した。だが、結果は同じ、また戻って来てしまう。俺は焦りに焦った。このまま帰れないのではないかと不安になった。

俺はまた走り出しながら、声を上げた。

「おい！誰かいないのか！駅員くらい居るだろう？おい！」

俺が必死に張り上げた声は講内に響き消えて行く。走っている俺に待っているのは、やはりあの暗いホームだった。俺は絶望感に心を浸しながら、ふと腕時計に目をやった。

「は？」

時刻は2時25分。俺がホームに降りた時刻だ。

もう頭がおかしくなりそうだ。ホームと講内をループして大分時間がたっている筈なのに、ホームに降りた時刻から一分も変わっていない。こんなことが現実にあるのかと、自分に問いていた。

ベンチに座り寒さの中、放心状態していると、不意にガタゴトと線路を走る列車の音が聞こえてきた。漆黒の列車がこちらに迫ってくる。

「なん……だ……？」

急に体が軽くなった気分になった。俺は何も考えられず、放心状態のまま列車に乗り込んだ。列車の中には十人程度の人々が乗り込んでいる。俺はふと、妻と娘二人の笑顔が頭をよぎった。

「それではまもなく発車いたします」

車掌の声が聞こえ、列車がゆっくりと動きだした。時刻はまだ2時25分。時は止まったまま、山田駅を後にした。

早朝、山田駅はいつもより少し騒がしかった。それもその筈、山田駅ホームで男の死体が見つかったのだ。ベンチに座ったまま、寝ているのかと思って、若い駅員の一人がそいつを起こしてやろうと揺すったところ全く反応無く、不安になって肌に触れると氷りのように冷たかったという。

髭面の駅員が同僚に話しかけた。

「おいおい、聞いたか？今日男の死体が見つかったんだってな？全く、いい迷惑だよ」

駅員は面倒くさそうに煙草をふかした。同僚は「一本くれよ」とねだり、貰うと、話し始めた。

「その男、俺の家のご近所で、井本さんって言うんだけどよ。可愛そうに……。奥さんと娘さん二人も残して死んじゃった……」

同僚は感慨にふけり、煙草に火を点けた。

六人の旅人

江戸時代。

絵草紙を売る、歳若い、行商人の「池田野金之助」は商売もそこそこだったが、そろそろ次の国を渡ろうかと決め、一本道を歩き始めた。

すると、目的の国と国を分ける、広大な山への入口を通りかかった。「獣道」と言えるような道が、上方へ伸びている。この山を越えなければ、国を渡れない。

金之助が入口で立ち止まっているとき「とっけえべえ、とっけえべえ」と歩きながらこちらに前方から歩み寄ってくる男が視界にはいった。

「とっけえべえ」をやっている男だ。「とっけえべえ」とは古鉄と飴を交換する行商だ。

貧相で髭面のその男は金之助の前に立つと「飴と交換しねえか？」と声をかけてきた。

「いや、やめておく」
掌を付き出し、断わると、男は金之助が登ろうとしていた山を一瞥すると、口だけの笑みを浮かべて口を開いた。

「あんた、この山を登るのかい？なら、教えておこつ。まあ、そこに座れ」

男は入口の隣にある祠を指差した。どうやらその隣の岩に座れと言つことだろう。祠なんかに座つたら罰があたる。

金之助は岩に腰掛けるた。少し尻が痛く感じて、座り心地はとても悪い。

男は、荷車に腰掛けた。

「教えるつて何を？」

「まあ、あんたが登ろうとしている、この山を登る上で知っておかないといけない事だよ」

男は金之助に有無を言わず話し出した。

ある日、男女六人の旅人は、国を渡るため、木々が天を覆うほど生い茂った広大な山を登った。しかし、登り始めて二時間ほど、旅人の一人が突如消えた。何時消えたのか、どこへ行ったのか検討もつかない。崖からすべり落ちたなら叫び声も聞こえるはずだが、だれも声を聞いていない。とにかく今さら降りることはできないので、このまま山を登り、向こうの国へと足を進めることを決めた。

だが、今度は全員で一休みしている間、また一人仲間が消えたのだ。付近を捜してみても見つからない。またも声無しに消えたのである。

旅人が四人になり、少し不気味に感じた一行の先導者は、離れて歩く事をやめ、全員を一人ずつ縄で繋ぎ、一列で歩くことを決めた。だが、誰か一人でも崖から落ちると、巻き添えをくらって、全員が落下するという、とても危険な案であったため、却下された。

以降、先導者が案を出す事は禁止されたが、結局、たいした案はできることは無く、全員で手を繋いで歩くという案が可決された。

しかし、いざ再出発しようとしたとき、先導者が消えている事に気づいた。残された男一人、女二人の三人は混乱した。国を渡るにはこの広大な山を越えなければならぬのだが、先導者無しでは到底越えるなどことは不可能。旅人は遭難してしまった。

時は流れて、七日後の夜、山の頂上に旅人は到達した。その時にはもう女一人になっていた。

目の前には、全てを包み込むような闇の中に灯りの点いた簡素な家がある。

今度は自分が消えるんじゃないかという気の狂いそうな恐怖に神経を尖らせていた旅人にとっては、とても救いになる灯りであった。安心した物腰で家に入ると、そこには囲炉裏があり、そこで老婆

が鍋を煮ていた。

「おや、客人かえ？」

優しく微笑む老婆に旅人は心癒された。

老婆は「寒かったじゃろう。お入り」と旅人を迎え入れてくれた。旅人は老婆がなんでも受け入れてくれるように思い、今までの奇妙な出来事を話し始めた。

「そうかい、そうかい。それはさぞ怖かったじゃろう」

老婆は話を聞くと、笑顔でゆっくりと頷き、今度は遠くを見ながら話し出した。

「今日はわしにとつて、大収穫の日でう。とても気分がいいんじや。今日は五つも食材がとれ、これで七日ほど食えて行けると思えば、こうして食材が自らやってきて……」

水を打ったような沈黙が流れ。

その言葉の意味を旅人が理解し、血の気が引いたと思えば、目の前の優しい老婆は、鬼のような形相に豹変していた。囲炉裏の火が消える。

六人の旅人は国を渡ることなく山の中で消えて行った。

「　　つてな話だ」

話し終わると、男は大きく息を吐いた。

「この山には山姥が出るそうだ。その祠に心をこめて手を合わせれば、山の神が守ってくれるそうだぞ」

男は祠を親指で指すと、立ち上がり、また「とつけえべえ」と言いながら道を進み出した。

金之助は震える手を気にしながらも、祠に手を合わせた。

人一倍臆病者の、金之助の心には、もはや恐怖しか残っていない。

息子の部屋

東京の一流企業で働くサラリーマンの藤井は、妻と息子『アキラ』の三人家族だ。

「ただいま」

「あら、今日は早かったのね」

藤井が帰ってくると、台所に立つ妻は、そっけない態度で言った。最近はおかえりなさい』も言わなくなり、14歳になった息子は反抗期に突入していこうとしていた。

「アキラはまだか？」

「いつも部活で遅いのよ。知ってるでしょ？」

妻は少し苛立ったように、またもそっけない態度で言った。妻との会話は最近少なくなってきたように藤井は思っていた。無論、息子との会話も少なくなっている。

家に帰ってもやることがないので、朝読み忘れた新聞を読む事にした。

『16歳少年、両親刺殺』

『タリバンでまたも自爆テロ』

『上海台風、使者58人』

「最近、厭な事件ばかりだな」

と、独り言を呟くと、不意に最近、息子の部屋を見ていないことに気づいた。昔はよく息子の部屋に行って、一緒にゲームをしながら、学校の話や友達の話などを聞いていたものだ。

久しぶりに息子の部屋を覗いてみたくなった藤井は2階に足を進めた。

「ちょっと、あなた？どこに行くの？勝手にアキラの部屋なんか覗

いたら怒られるわよ！」

何も言っていないのに、すべて妻は分かっている。20年の付き合いからくるものなのか。

「久々だな」

部屋の前に立つと、そう呟いた。

藤井はドアノブをひねり、扉を開けた。

「なんだ、やけに真っ暗だな」

息子の部屋は深い闇に包まれていた。一寸先はまったく見えない。

藤井は電気を付けようと、部屋に入ると、勢いよく入口の扉が閉まり、外の光が絶たれ、藤井を闇が包んだ。

「なんだ！？どうした！」

藤井は焦った。部屋から出るため、扉をドアノブをひねるが、押しても引いても開かない。内側から鍵をかける仕組みになっているが、鍵はかかっている。

「ただいま」

ふと息子の声が一階から聞こえた。

「あら、おかえりアキラ」

「あれ、父さんは？」

「まだ、帰ってきてないわよ」

妻のその一言に藤井は驚愕した。

「何言ってるんだ・・・あいつ・・・あいつ・・・？」

藤井は扉に耳を当てて二人の会話を聞いていた。

すると、息子が二階を上がってくる足音が聞こえてきた。自分がいる一人部屋に向かっている。藤井は息子に扉を開けてもらおうと、声を上げた。

「おい、アキラ！ここ開けてくれ！！」

しかし、聞こえている筈のだが、反応は無かった。

そのまま、一人部屋に息子がやってきて扉を開け、入ってきた。

「……………どうということだ……………」

藤井はわけが分からなくなり、頭を抱えて膝をついた。

藤井はまだ、闇に包まれている。たしかに息子が自分がいる一人部屋の扉をあける音がしたのだ。それなのに自分がある部屋の扉は開いていない。藤井の後方では息子がゲームをする音が聞こえてくる。

「おい！アキラ！開けてくれ！！頼む！開けてくれ！！」

扉をドンドン叩いて、自分がここにいることをアピールした。

「ただいま」

すると、また誰かが家に入ってきた。

「あら、今日は早かったのね」

妻が自分が帰ってきたときのように応答していた。

「なんだあいつ……ふざけるなよ……！！」

藤井は扉を破ろうと体当たりした、さらには飛び蹴りまで繰り出したが、扉はビクともしなかった。

「くそ……なんで出られないんだ……」

息をきらしながら呟くと、下から声が出た。

「おい、アキラは帰ってきたのか」

藤井は大きく口を開けたまま、驚きと恐怖と疑問に固まってしまった。

一階から聞こえた声は、明らかに自分の声だったのだ。

人間の顔じゃねえよ

某中学校に通っている『佐野広志』という2年生の男子がいた。彼は幼いころに事故で大怪我をし、顔半分には焼け爛れたような大きな傷が残っていて、彼はそれをものすごく気にしていた。しかし、心無い生徒は、彼の傷をみて「化け物」だとか「妖怪」だとかを平気で口にしていた。

最所はそんな悪口で済んでいたのだが、夏休みが明けた頃、それはイジメに変わっていた。いじめっ子たちの中にいた『太田智明』は、最も残酷でリーダー格のような存在でもあった。広志を罵倒するのはもちろん、帰り道に待ち伏せをして仲間数人で殴る蹴るなどの暴行。その他、休み時間は皆の前で裸にするなど、毎日が広志にとって地獄そのものだった。

「おい」

広志が家路に足を進めていると、後ろから聞きなれた、恐怖の象徴とも言えるべき人間の声が聞こえた。智明だった。

いつものように帰り道で広志を待ち伏せていた智明はめずらしく一人だった。

ふと広志は、不気味に笑みをうかべている智明の右手を見ると、その手には鉄パイプが握られていた。広志の血の気がサツとひいて行く。智明が鉄パイプを道にカラカラと擦らせながら、ゆっくりと広志に近づいて行った。

「な・・・なにすんだよ・・・」

こちらを見据えて、歩み寄ってくる智明に只ならぬ恐怖を感じた広志は腰をぬかしてしまった。

「人間の顔じゃねえよ」

一言、蛇に睨まれた蛙のようになった広志に浴びせると、智明の目が見開き、表情が変わり、右手に持っていた鉄パイプを広志の傷のないほうの顔に振り下ろした。

グチャッと厭な音が鳴り、広志の悲痛な叫びが辺り一面に響く。智明は満足気に微笑むと、血のついた鉄パイプを蹲る広志のそばに捨て、歩いて去って行った。

その日以来、広志は学校に来なくなった。

「全然来ねえじゃん、広志のやつ」

仲間たちと屯っている中、煙草を口に啜えようと、智明は笑いながらそんなことを呟いた。

次の日、夜中、両親が仕事に行っている間、智明の家が火事になったという情報が生徒たちに知らされた。

一人で寝ていた智明は逃げ遅れてしまい、体や顔に全治1年の大火傷を負った。しかし、奇跡的に命をとりとめ、智明は近くの総合病院で入院することになった。

ある日、顔中に包帯を巻いてミイラのようになった智明のもとに、一人の人物が現れた。

その人物は、顔に焼け爛れたような傷と、色が変わってどす黒く痣がある、とても見にくい顔をした智明の同級生。

「お前は……」

智明は、その人物を見据えた。そいつは、あの『佐野広志』だった。

「なんだよ……お前……何しに来たんだよ」

智明は、ただ佇む広志の、前までの雰囲気とは全く違っている事に気がつき、まるで自分の目の前にいる広志が別人の誰かに思えた。しばらく沈黙が続くと、広志は無言で智明に近づき、包帯を引きちぎった。

「うわあ……」

智明は泣き叫ぶように露になった自分の顔を覆った。

「てめえ……」

血が滴り落ちる、焼け爛れた真っ赤な顔を広志に向けた。その顔からは、とても表情が確認できない。

「人間の顔じゃねえよ」

広志は一言、智明に浴びせると、不気味に微笑んだ。

「お前……まさか……」

智明の頭の中である日、広志を鉄パイプで殴った出来事がフラッシュバックし、智明は広志があの日、自分の家に火をつけたことを直感的に認識した。

呆然とする智明に、広志は満足気に微笑んだまま、背を向け去って行った。

広志の復讐は、その日、幕を閉じた。

不気味な葬儀屋

出勤のためサラリーマンの田野は電車をよく使う。

ある日、切符券売機に並んでいると、先に前で切付を買っている、スーツを着て中折れ帽子を被った初老の男性が、なにやら慌てていた。田野が声を駆けると「財布を落としてしまった」と言う。

田野は男性に行き先を聞くと、その人のために切付を買ってやった。

男性は「助かりました」と帽子を取って丁寧に頭を下げた。

「お礼と言ってはなんですが、一つあなたに教えましょう」

男性は人差し指を一本立てると、口元だけの笑みを浮かべ、田野に言った。

田野が「何をですか？」と聞くと、男性は表情を固めまま、囁くように口を開いた。

「D行きの電車が脱線事故をおこし、多くの人々が死にます」

D行きの電車はいつも田野が乗っている電車だ。「急に何を言いだすんだ」と思ったが、男性の表情が気にかかった。何もかも見据えたような笑みで、田野を見つめている。結局田野はD行きの電車に乗らなかつた。

しばらくして、駅のホームで「何故乗らなかつたのだろう」と後悔し、頭を抱えていた。大幅に遅刻してしまったのだ。腕時計を何回も見直し、針が刻んでいる時間が嘘だと思いたかつた。それから別の電車に乗り、会社に向かつた。

遅刻して作業が遅れてしまったこと、そして男性の言っていたことを信じてしまったことを仕事でも、田野は引きずっていた。しかし、休憩時間、テレビを眺めていると、驚くべきニュースが報道されていた。D行きの電車が脱線事故を起こし、100人以上が死亡したのだ。

田野は飲んでいたコーヒーを落とした。駅で会った男性の言つて

いたことは本当だった。

その日、不思議なこともあるものだと思いながら、家に帰るため駅に向かっていくと、前方から「あの男性」が歩いてくるのが見えた。田野は素通りしようとする男性を呼び止めた。男性は田野のことを覚えていたらしく、また帽子を取って丁寧に頭を下げた。

田野は男性に聞いた。

「なんで電車が脱線するって知っていたんですか？」

男性は静かに答えた。

「僕は葬儀屋です。長年仕事をしていると、死の近い人間が、わかるものなんです。」

男性は笑っていたが、田野は怪訝な表情をしていた。田野は男性を信じられなかった。葬儀屋だからと言って、今から死ぬ人間がわかる筈がないと思っていた。

男性は懐に手を入れると、名詞を取り出した。真正正銘の葬儀屋だった。まるで、田野が自分を疑っていることを、わかっていたかのようなだった。すると、続いて、おもむろに通りすがりの女性を指差した。

「彼女は、その曲がり角でトラックに撥ねられて死にます。」

そう言ったとき、丁度、女性が葬儀屋が指差した曲がり角に入った。瞬間、トラックがクラクションも鳴らさず女性に追突した。女性は叫び声もあげず、空中に舞うと、電柱に頭を割られた。

啞然と死体を見据える田野に、葬儀屋は「ね？」と笑いかけた。

「もう一度言います。僕は死の近い人間がわかるのです。」

田野は葬儀屋の眼を見れなかった。人々が事故現場に集まるなか、田野は早くここを離れたいと思った。いや、どちらかと言うと離れたいののは、事故現場より、葬儀屋からだった。

「あなたは家には帰れません。」

突然、耳元で葬儀屋に囁かれた。田野の背筋に悪寒が走る。

「どういうことだ」と葬儀屋に聞くと、笑顔の表情を固めたまま、田野に言った。

「あなたが家に帰る前に死ぬということですよ」

田野は葬儀屋の胸倉をつかんだ。が、何も言えない。反論する言葉が出てこなかった。今まで葬儀屋が自分に見せてきた「予言」は全ての中していた。何も言えないまま、唇を噛んでいる田野の変わりに、胸倉を掴まれている葬儀屋が口を開いた。

「どれだけ力を見せても、いつも最後は、僕を信じない。それも自分に死の宣告をされるとです。まったく人間は都合のいい生き物ですよ」

田野は手を話した。葬儀屋はニヒルは笑みを浮かべ、去っていった。田野はその場からピクリとも動けなかった。突然胸部に激しい激痛を覚えた。それと同時に意識が薄れていく。目の前が霞み、葬儀屋の後姿がぼやけていった。

最後に葬儀屋が、こちらを振り向くと、おもむろに手を振ったような気がした。

箆笥

引越し先のアパートの部屋を見た僕は少し驚いた。

古い畳張りの部屋の隅には、7段の引き出しがついた「たんす」が一つだけ置かれていた。あとは綺麗にかたずいて何も無い。8畳の部屋に「たんす」しかないのだ。

さすがに「おかしいな」とは思ったが、大家に言うほど気にならなかった。僕は引越し前の家から持ってきた荷物を、青と白の作業着をきた引越しセンターの人たちと、部屋の中へ運んだ。

作業は夕方に終わった。新しい部屋での新しい生活に気持ちが高揚し、部屋の中で大きく深呼吸した。

息を吐き出すと、横目にあの「たんす」が目についた。そろそろ衣類をいれるために、中を掃除しようと「たんす」の引き出しを引くが、ビクともしない。どの引き出しも開かないのだ。「たんす」自体も、まるでその場所に杭を打たれたように動かない。

途端に僕は「たんす」のことが気になった。結構古そうなそれは何年も前から置かれていたのかもしれない。妙なオーラがその「たんす」から出ている気がして、僕の好奇心を揺さぶった。

隣人への挨拶よりさきに大家に「たんす」のことを聞かため、部屋を出た。

アパートに入ったときに満面の作り笑顔で挨拶して来た大家の部屋を僕は覚えていた。部屋を出てすぐに右に曲がり、狭い通路をまっすぐ歩き、曲がり角を曲がり、階段を降りると、すぐ大家の部屋が見える。

僕は大家の部屋に足を進めると入り口に取り付けられたインターホンを押した。すると中から「はあゝい」と面倒くさそうな声が聞こえると、すぐに入り口が開き、中から白髪頭の老婆が現れた。この老婆こそ大家だ。僕が最初見たときの満面の笑みは消え失せていた。

僕は「なんだ、あんたか」と言いたそうな老婆の表情を前にして口を開くのは、少し気が引けた。が、なんとか口を開いて「たんす」の事を聞いた。

すると、大家は深いため息をすると「こんなに早く聞いてくるとは思わなかったよ」と口元だけの笑みを見せると、僕に部屋に入るように促した。

回転椅子に大家は腰掛けるとアゴで近くの椅子を指した。そこに座れと言う事なのだろう。ここまで来るとあの時見せた大家の笑顔（作っていたとはいえ）の理由が分からなくなってくる。

「だいたい信じないんだけどね」

と大家は「たんす」のことを話した。今まで何度も聞かれ、何度も話し、信じられなかったんだろう。終始僕に面倒くさそうに話した。

話の内容はこうだ。十二年前、僕が住んでいる部屋に男女カップルが暮らしていた。結婚を前提に付き合っていたが、女の両親がそれをどうしても認めなかった。だが二人は諦めることなく両親に同意を求めていたが効果はない。遂に女のほうが別れを切り出した。男は別れる気など毛頭なく、両親と共に協力して認めてもらい結婚することを、強く心に抱いていたのが、女の行為を「裏切り」と思い込み、殺してしまっただろう。

それから女の行方不明が周囲に広がり、それは警察の耳まで届き、男は逮捕された。男は女を殺したことを自供したが、死体が見つからなかった。男は警察の尋問を受けるとすぐに供述したそうだった。

「死体をバラバラにして、筆筒に隠した」

警察は筆筒から死体を回収しようとしたが、筆筒が開かない。仕方なく壊しにかかることになったが、男が供述した時から警察内で不審死が多発。警察の中では「筆筒の呪い」などとオカルトな噂が

流れるようになった。しかも、供述して三日後に男が発狂して、壁に頭を打ち付けて死んでいるのだ。結局死体回収は諦められた。

大家は話し終わると、疲れが出たのか「ふう〜」と息を吹いた。確かに信じがたい話だった。その話が真実なら僕の部屋にある「たんす」は、女性の手や足や頭が入った箆笥だ。僕が下を向いて黙っていると大家の口が再び開いた。

「あの箆笥はね、アンタが思っている通り今もあるよ、このアパートに。しかもアンタの部屋にだ。良い事を教えてやる。しつこくあの箆笥を開けようとしないうことだ。引越してきたばかりの人に言うのもなんだけどね、さっさと引越ししなおした方が身のためだよ。『彼女』どうやら、あそこが気に入っちゃったようだ」

大家はニヒルな笑顔を僕に向けながら、話した。僕は正直、部屋に戻りたくなかったが大家と一緒にいるのも嫌だったので、そこから出て、部屋に戻った。

やけに最初見たときより箆笥が眼に入ってくる。窓から入ってくる夕日に箆笥が照らされて、余計に不気味に覺えた。

僕と箆笥の間に沈黙が流れる。さっさと引越しの手続きをしなけらばならなかったが、自分の中の好奇心がまた揺れ動いた。

ゆっくりと箆笥に近づき、手を伸ばして引き出しの取っ手に手をかけた。力をこめて引き出しを引く。

「バリッ」

なにかが剥がれる音と共に引き出しが開いた。焦った僕は引き出しを戻そうとしたが、ビクともしない。箆笥から離れようとしたが、取っ手から手が離れない。硬く接着されたようだった。

ゆっくりと僕が開いた箆笥から、細い腕が伸びてきた。啞然とする僕の腕をそれはガツシリと掴んだ。掴まれたと思つた瞬間、腕は僕を持ち上げ、僕の体は宙を舞った。一瞬箆笥の引き出しの中に女の顔がこちらを見つめているのが分かったが、それに向かって僕は引き出しの中に吸い込まれた。

僕はそれから、部屋で壁に頭を打ち付けて死んでいるのが発見された。

三十年代後半、未だ童貞の恋

三十年代後半、未だ童貞の浜崎はデパートにて、ある女性を見かけた。

女性は足が長く、背も高い。白と青を貴重としたフリルの付いた、夏にぴったりの、涼しげなワンピースを着ていた。まるでモデルのようだ。自他共に認める「醜男」である浜崎と正反対の女性だった。しかし、浜崎はその女性を一目見ただけで、生まれて初めての感覚に陥った。このとき、ドラマや小説でよく見る「恋の病」という意味がようやくわかったような気がした。

彼女の顔を見ただけで顔が熱くなる。気付けば浜崎はデパートに通いつめて行った。女性はいつもデパートにいるのだ。デパートの衣服売り場に、まるで何か物思いに耽っているように、そこに立ち止まって。

ある日、浜崎は女性に声をかけた。今まで、異性を極めて苦手としてきた浜崎にとって、その行為は、多大な勇気のひとつだった。だが、女性は何も答えてくれない。浜崎は少し傷ついた。

しかし、浜崎は何とか女性に答えてもらおうと、必死になった。日課になったデパート通いでは、その女性に声をかけることは忘れなかった。だが、一向に女性は答えてくれない。それでも、浜崎は声をかけ続けた。

そんな日々を重ねていくうちに、浜崎は女性に様々な話をした。たとえば彼女が返事をしてくれなくてもいい。ただ聞いて欲しい。そんな気持ちで、彼は女性に会社の事や、両親の事、更には自分の学生時代の話などを女性に聞かせた。

女性は答えない。澄んだ瞳で、遠くを見つめている。だが、ふと笑ったような気がした。そんな女性の横顔を見て、浜崎は決心をした。

「彼女に告白しよう」

浜崎はデパートを出ると、都会の雑踏の中で呟いた。

一週間後、彼はいつも通りデパートに行くと、女性のもとへと駆け出した。初めてオシャレをして普段とはまるで違う格好に、片手には初めて異性に贈るプレゼントである、花束を持って。

浜崎は女性の前に立つと、自分の心の中にある、ありつたけの思いを打ち明けた。伝えたいことが多すぎて、ところどころ支離滅裂になりながらも、彼女の瞳を見つめ告白した。

大きく深呼吸すると、女性に花束を差し出した。だが、女性は受け取らなかつた。それどころか反応すらしなかつたのだ。

そんな女性を浜崎は笑顔で受け止めた。彼は花束をゆっくりと女性の腕に持たせた。

「また来るよ」

浜崎は微笑むと、その場を後にした。

この一連の浜崎の行動を同じ衣服売り場にいた人間で知らないものはいない。浜崎は知らぬうちに、地域で話題となっていた。

一人の女性に振り向いてもらおうと、一生懸命努力を重ねる一途な浜崎に対して、人々は、彼に気付かれないように、こう言うのだ。

「アイツ、なんでマネキンに話しかけてんの？」

「ほっとけよ、気持ち悪い」

墓穴（前書き）

なんかあれば消します。

墓穴

8月のことである。

波の音だけが虚しく響く海辺。数人の男女は、一つの大きな穴を見下ろしていた。穴の中には、それを覆うぐらいの大きさのブルーシートもある。

海辺に掘られたそれは「落とし穴」である。彼らは青白い顔で、その穴を囲うようにして立ちすくんでいる。

主婦である幸恵は、夫が持つ、多額の保険金を狙っていた。なにも生活が苦しいわけではない。そもそも生活のための金を幸恵は狙ってははいない。夫とおくる生活には、自分が遊べるぐらいの金が足りないと感じていたのだ。

何とか夫の保険金を手に入れることは出来ないかと、白昼、テレビを見ながら、一人思案していた。

保険金は夫が死ななくては手に入れることは出来ない。殺人ではこちらが損。「事故」という形で夫は死ななければならぬ。では、その事故をどうするか。結果「殺人」となるのだが、警察にどう「事故」と判断させるかを、幸恵は考えていた。

テレビはバラエティ番組を放送していた。そこではタレントが、物の見事にスタッフや他タレントの術中にはまり、巨大な「落とし穴」に落下していた。

<これだ！>

幸恵はひらめいた。この「落とし穴」を使って夫を殺せばいいと。場所は海辺、日は27日。夫の誕生日である。

<我ながら斬新な発想ね。これで保険金は私のもの>

幸恵はさっそく友人たちに連絡をした。彼らの手をかりなければ、この計画は実現しない。一人では人が死ぬほどの落とし穴を掘れない。

もちろん、友人たちには「誕生日のサプライズ」として、「落とし穴」の説明をしている。計画に乗ってくれなかった友人もいたが、計六人集まった。

実行日前日。幸恵は夫に「父の様子を見てくる」と行って家を出た。幸恵の父は肺癌で、寝たきりだった。

だが、幸恵は実家には勿論行っていない。友人たちとシャベルを手に、海辺の砂浜を掘り続けていた。

<少し早いかもしれないけど、あなたの墓穴を掘ってあげるわ>
幸恵は穴を掘りながら、保険金が手に入った自分を想像し、微笑んでいた。そんな幸恵と共に掘っていた友人たちは、彼女には内緒で、あることを企画していた。

穴の完成には半日かかり、暗く夜になっていた。友人たち、幸恵を含め、皆疲れきっていた。幸恵は友人たちに礼を言うと、夫の下へと向かった。

「遅かったじゃないか」

夫は少し不機嫌な様子だった。そんな夫に幸恵は笑顔で言った。

「今日はあなたの誕生日でしょ？」

夫は「覚えていてくれたのか！」とでも言うように、表情を一変させた。そんな夫をみて幸恵は「単純な人」と心の中で嘲笑した。

幸恵は「見せたいものがあるのよ。ついてきて？」と夫の手を引っ張り車に乗せた。少しばかり困惑しながらも、楽しそうな夫を、あの海辺に連れていった。

海辺につくと、友人たちが手を振っていた。夫はその光景に、まますます表情を緩めていった。実に嬉しそうな顔だった。

幸恵は「こっち」と夫の背中を押した。その向こうには落とし穴が待っている。友人たちは幸恵の後ろを付いてきている。夫に負けないくらいの楽しそうな顔をしながら。

「おいおいどこだよ」と嬉しそうに見回す夫とはまた違った嬉しさが、幸恵には込みあがってきた。もうすぐ自分が保険金を手にすることが確定する。あと四歩、あと三歩、二歩、一歩……。

「ど〜ん！」

幸恵は待ちきれなかったのか、有頂天に跳ね上がった声と共に、夫を押しとばした。夫は叫び声をあげなる間もなく、落とし穴に落下していった。

しかし、先ほどの声は幸恵はだけのものではない。幸恵の後ろに付いてきていた友人たちの声も含まれていた。

彼女が夫の背中を押すのと、ほぼ同時に、彼女は背中を友人たちに押されていたのだ。

友人たちの考えはこうである。夫だけをサプライズにかけるのは少しばかり面白く無い。ならば、妻である幸恵もサプライズにかけるようという魂胆だ。

幸恵は悲鳴とともに落ちていった。穴は深く、落下した時の衝撃は形容しがたいものだった。体中が麻痺し、動けず、ただ、宙を見つめるだけだった。

友人たちの笑い声が聞こえる、しだいにその笑い声は、落とし穴の内壁がくずれていく音によってかき消されて行った。

幸恵の体は次第にもものすごい速さで砂に埋もっていく。「助けて！」と叫ぼうと開けた口に、大量の砂が入りこんだ。

左手を目いっぱい落とし穴の向こう側に伸ばした。が、意識は薄れていく。悔しさや虚しさが胸を満たしていくなか、左手から結婚指輪が離れていくのを、最期に感じ取った。

輪廻転生

4月28日、東京で夫婦が自分の子供「幸則くん」を殺害する事件が起こった。

死因は身体中を鈍器で殴られた事による外傷性ショック死。殺害から3日後、夫婦は警察に殺害容疑で連行された。事情聴取ですぐに殺害を認めたものも、殺害動機はなかなか語ろうとはしない。警察は幸則くんの祖母の要求に答えて、なんとか動機を聴取することに成功した。

「幸則くん」が両親に向かって奇妙なことを言い出したのは殺害から7日前。

4月21日。
「幸則くん」が突然、母親に向かって、自分の名前は「小淵良哉」だと言い出すのだ。母親はその言葉を無視出来なかった。すぐに父親にそのことを告げるが「偶然だよ。テレビで聴いたセリフを言ったただけだろ？」と話を流してしまった。

4月22日。
「幸則くん」が寝言で「何で俺を殺したんだ」などと言う様になる。口調も変わり、まるで自分の息子じゃないようだった。さらに「痛い！苦しい！」と叫び出し、慌てて「幸則くん」を起こし、どうしたのかと訊くと、「お父さんとお母さんが僕を殺す夢を見た」と言い出した。

4月23日。
「幸則くん」が庭を掘る行動をとるようになる。
母親が何度止めても、目を離れた隙に、園芸用の小形のシャベルで庭を掘る。

「幸則くん」が掘った穴は父親がまた埋める。これが殺害するまで毎日続く事になった。

4月24日。

「幸則くん」が通う幼稚園から電話があった。

電話をかけた保育士の話では、「幸則くん」が「僕はお父さんとお母さんに殺された。首を包丁で斬られて殺された」と言っているのだそうだ。「同じ園児たちが怖がるので、あまり刺激の強いテレビを見させているようなら、控えてほしい」という電話であった。

4月25日。

「幸則くん」の奇行が近所にも噂されるようになった。

「虐待してるのではないか」「変なテレビでも見せているんだろ」「う」など、耳に入る噂は後を絶たない。次第に「幸則くん」の両親はその奇行に危機感を抱いていく。

4月26日。

「幸則くん」の奇妙な口調が一段と目立ってきた。難しい言葉を使ってみたり、話し方はまるで大人のようなようだ。その言動には怨みのようなものがこめられている。そんな気が父親はした。

4月27日。

「幸則くん」が庭を掘る行動は夜まで続いた。いくら注意しても止めようとはしない。時に近くの交番に勤務する警官に「自分は両親に殺された」と言う話をする時は、冷や汗をかく。

そして対に「幸則くん」が庭から両親がどうしても秘密にしておきたい、ある物を見つけ出してしまった。

4月28日。

「幸則くん」殺害。

「で？それが動機か？」

40代後半の刑事、「倉本」が俯く父親の顔を覗き込むようにして聞く。周りにはその刑事と、皺の多い白髪のベテラン刑事。20代前後の若い刑事の三人が、薄暗い取調室で父親の周りを囲んでいた。

どうも動機にしては奇妙だ。「幸則くん」の奇妙な言動や行動だ

けが動機ではないはず。他になにか知られてはいけないことでもあったはず。いや、まだ決め付けてはいけない。もう少し聴取してみるのがいいか。倉本はそう思い、口を開こうとした時、白髪のベテラン刑事が先に口を開いた。

「小淵良哉って、何年か前の事件で出てこなかったか？」

「あ」と気がついた。倉本は壁に凭れてボーっとしている若い刑事に「小淵良哉」について調べるよう大きな声で命じた。

我に返ったように反応すると、若い刑事はさっさと取調室を出て行った。

「小淵良哉」についてのデータはすぐに見つかったようで、若い刑事はすぐに2、3枚のプリントを持ってきた。

それは別の捜査班が10年前から調べている行方不明事件だった。プリントには30歳前後の男の写真が貼ってある。

「確か『幸則くん』は自分が『小淵良哉』だと言っていたが、見覚えがないか？」

倉本はプリントの写真を指差しながら父親に聞いた。

「知らない」と父親は答えたが倉本は信用することはなく、家宅捜索を再度決行することを決めた。

父親の話を信用する気はなかったが、「幸則くん」が掘っていた庭を捜索した。

3人がかりで掘りおこした結果、見つかったのは死後10年が経過した死体が出てきた。

顔を見合わせる刑事たち。

その後、DNA鑑定でその死体の身元が判明した。

「お前の庭から『小淵良哉』の死体が見つかった。これはどういうことかな？」

倉本は父親に聞いた。

両親の庭から発見されたのは「小淵良哉」の死体。父親はすぐに「小淵良哉」の殺害を認め、二人は2つの罪を背負うことになった。

動機は金銭トラブル。「小淵良哉」に金を貸してほしいと頼んだところ、貸してくれず、それでも必死で母親と共に頼んだのだが「こちらも困っているんだ。いちいちお前らに貸してられない」と断わられたので、殺害して死体を遺棄したのだと言う。

それから2年後、「幸則くん」が産まれたのだ。

<輪廻転生>

倉本の頭にこの言葉が浮かんだ。

幸則くんは、殺された過去の自分を見つけてほしかったのだろうか。それなら幸則くんの願いは叶ったのだろう。だが、やはり倉本は信じられないようで、複雑な心境が彼に残されていた。

ディスク

テレビ局で働く「小田」の下に、一枚のディスクが届いた。送り主は不明。なんだか怪しい代物に思えた。

勝手に読み込んで問題を起こしては、マズいので、一応、外出中の上司に連絡した。

「なんかDVDかなんかが届いたんですけど……」

「DVD?」

「はい、送り主が不明なんですけど、読み込んでみてもいいですか?」

「他の局からかなあ……。まあ、一応読み込んでみてよ」

「わかりました」

「なんか起こつたら、その時はその時だし」

「はい、ありがとうございます」

相手には見えないが、小田は一礼して、電話を切った。

早速、ディスクをパソコンに放り込むと、動画再生ソフトが動き出した。しばらくすると、動画が画面に現れた。

「ん?」

小田は画面に釘付けになった。映像は白黒でかなり古いものと思える。しかし、その画面に映し出されている映像が、とても異様なものだった。

一面荒地で、建物すらなく、地平線まで見渡せる広々とした空間が映し出されてる。まるで「焼け野原」のようだった。小学校や中学校の時の平和学習で見せられた。あの第二次世界大戦で原爆を落とされた直後の広島様子に酷似していた。

いや、その映像はまさに、当時の広島そのものだった。

今にも肉が焦げたような悪臭が漂ってきそうな、沈黙の中の戦慄とした空気。

小田の背筋に悪寒が走った。

何でこんなものを送りつけてきたのだろう。小田は気味悪く思った。そのとき丁度「ごめん、ごめん」と笑顔で電話をかけた上司が帰ってきた。

「すいません」

「ん？なんだ小田」

「これ、見てみてください」

パソコン画面を指差す小田。まだ映像は再生されている。映像は五分間ぐらい流れるようだ。

「なんだ、これ」

上司は呟いた。その言葉のトーンから驚愕している様子がかげえた。

「おそらく、原爆を落とされた直後の広島映像だと思います」

「いや、違う」

上司は画面を凝視したまま、小田の意見を否定した。

「じゃあ、長崎ですか？」

「違う」

上司は一向に小田を見ようとしない。短い言葉で小田の意見を否定する。すると、上司はしきりにマウスを動かして、巻き戻しては再生していた。

「間違いない……」

呟く上司を見ると、額に大量の汗がついていた。冷や汗だ。マウスに触れている右手はワナワナと震えている。

「あの……」

小田が声をかけた。上司はゆっくりと小田の方を向いた。上司の目は明らかに取り乱した様子だった。

「どうしたんですか？」

小田がまたもや声をかける。すると上司が「これをよく見ろ」とまた映像を巻き戻した。巻き戻された映像は、やはり一面焼け野原だった。どの映像も死臭が漂ってきそうに思われる。

しばらくして、上司が「ここだ！」と大声を出して、映像を止めた。

「よく見る。少し残っている建物の奥に、なにかが見えるだろう」
上司が言った。確かに何か巨大な黒い立像が見える。

小田はそれを凝視した。するとだんだん、それが人の形をしていることに気がついた。腕の片方は天に掲げている。掲げた手には何か持ってそうだ。そして頭。なにか被っている。次にもう一方の腕。抱き寄せるように何か持っている。

瞬間、小田はハツとした。先ほどの悪寒とは比べ物にならないくらい寒気が彼を襲った。

「これって……」

小田が映像に映る、立像を指差す。

「そうだ」

上司は頷き、言った。

「この巨大な黒い物体は、あの『自由の女神像』だ」
広島や長崎に自由の女神像があるはずない。じゃあ、なぜこの荒地に自由の女神が光臨しているのだろうか。

像は、かなり遠くに見える。その大きさからしてフランスのもではなさそうだ。

それならこれはアメリカの「自由の女神像」となると、この荒地の場所は……。

「映像を分析しなければ、はっきりとしたことは分からないが……」
そう言って、上司は映像を再生した。

果てしなく広がる焼け野原。黒い立像は画面から消えていく。しばらくして、とんでもないニュースが入ってきた。

『アメリカが消えた』

突如、アメリカとの外部からの通信が途絶えたそうだ。上司と小田は映像を前にして顔を見合わせた。

丁度、映像が終了したところだった。

十時から十一時まで

午後十時。会社帰りに何となく、旧友に電話をかけてみた。富樫の唯一の友人と言つていい、村本は結婚相手と居酒屋を経営している。

富樫は村本の居酒屋によく、足を運んでいた。そのときも「今から行く」という連絡をいれる予定だった。が、電話に出た村本の様子から、そんな場合では無い事を確信した。

「ああ……待つてるよ……」

泣きそうな声だった。いや、泣いていたかもしれない。とにかく酒なんて飲んでられないと、急いで村本のもとへと走った。

電気も何もかも消していたので、村本の居酒屋が一瞬どこにあるのが、分からなかった。営業中という札が出ているにも関わらず、まるで店が潰れてしまったかのような静けさだ。

入り口に手をかける。開いていた。

恐る恐る開けてみると、暗闇の中に何か人のようなものがいた。だが、それは異様で、まるで宙に浮いているように見えた。いや、浮いていたのだ。富樫はそれが「吊るされている」と悟った瞬間。パツと部屋の明かりがついた。

光と共に富樫の目に飛びこんできたのは、女性の首吊り死体だった。ポタポタと水が滴る音がする。死体から流れているようだった。それは見覚えのある顔をしていた。眼をカツと見開いたそれは、村本の結婚相手の園子だった。

呆然と、変わり果てた園子を眺めていると、後ろから突然「富樫」と呼ばれた。驚いて、勢いよく後ろを振り返ると、カウンターに突っ伏している村本の姿があった。その横には日本酒が三本。三本目の半分まで飲み干していた。

「村本……お前、何してんだよ！」

富樫は村本に駆け寄った。しかし、村本は富樫を見ようとせず、

ガラスコップに酌んだ酒を口に運ぶだけだった。富樫はどうしてか言葉が出せなかった。富樫の後ろには首を吊った園子。そして目の前には酔いつぶれた村本。富樫にとつて、まったく現実を帯びない状況だった。ただ、立ち尽くしているだけだった。

すると、村本が口を開いた。

「園子は自殺したんだよ」

真っ赤になつた目で、彼方を見つめながら言った。

「自殺？」

「そうだ。自殺だよ」

「なんでそんなことわかるんだよ」

「遺書が見つかったんだ」

村本はどこからともなく、綺麗にを出してきて「読めよ」と言った。富樫はそれを手に取って広げてみた。殴り書きのように乱暴に書かれた文字が表すものは「さよなら」の一言だけだった。

「さよならだけで済ましてんじゃねえよ」

声の主は村本だった。視線を遺書から村本に移すと、彼は泣いていた。ガラスコップに入った酒はこぼれていた。

声をかけれないまま、村本を黙って見ていると、どんどん酷くなつていき「慟哭」へと変わっていった。

店内に響き渡る、村本の嗚咽と叫び声。その中に園子の死体。それらが共存する空間に自分がいる。富樫はそんな現実を認めたくなかった。

だが、逃げ出したい気持ちを抑え、口を開いた。

「もう、お前は戻つとけ。警察には俺が連絡するから」

警察に連絡してないことは、入ってきたときからわかっていた。

千鳥足で、よだれや涙で崩れた顔をした村本を店の二階に連れて行った。

吊るされた園子の死体を見上げた。村本のいない店内で、存在するのは園子と富樫のみ。時刻は十一時になるうとしている。二階からは未だに村本の慟哭が聞こえるが、警察はまだ来ていない。

なぜなら呼んでいないのだから。

「無様なもんだなあ」

富樫はしみじみと、口元に笑みを浮かべ園子に話しかけた。もちろん答える事はない。虚ろな瞳を反転させ、唇から唾液を滴らせているだけ。

「お前がさあ……浮気なんてするからだよ……村本って男がありながら……勿体ねえよなあ……」

そう言うと、クククと小さく笑った。二階からは村本の慟哭が聞こえてくる。

今だから言うけど

「もしもし？なんだ、小倉かよ。どうしたの？」

「あのさ、ちよつと時間ある？」

「ん？まあ、ちよつとならな」

「じゃあ、近くの公園にちよつと来てくれない？」

「なんで？」

「いや、ちよつと話したい事があってさ」

そんな会話が、俺が中学三年の時にあった。電話の相手は「小倉」という小学校低学年からの親友だったが、その電話のあと、俺はそいつが行つてた「近くの公園」に行つたが、結局、小倉は来なかつた。

いつたいたんだつたんだよと、次の日、小倉を問い詰めたが、はぶらかすだけで、何も答えなかつた。

で、死んだ。何日後かに小倉が電車で飛び込んで死んだ。あまりの突然のことだったので、しばらく実感がわかず、悲しみも薄く、涙も流れる事はなかつた。

だが、だんだん「小倉の死」に対して実感がわいてきて、受験勉強も身に入らないぐらいに心にダメージを負っていた。体調も崩し、学校も休みがちになってきていた。

ある日、そんな俺はクラスの友人の一人に「なんで小倉って、死んじゃったのかな」と聞いた。

そのときの俺のテンションがあまりにも暗すぎていたのか、若干相手はどもりながら、説明してくれた。

「小倉って、あいつ受験勉強で結構追い込まれていたみたいでさ……。本当にそれが理由かはっきりしないけど、あいつ、私学の受験に落ちただろ？やっぱり自殺の理由の一つになつてる事は間違い無いかもな」

俺は、それを聞いて思い出した事があった。あの時の電話での会話だ。

小倉は俺に何か言いたかったんじゃないか？俺があの時、もつと問い詰めていけば、あいつの力にもなれたかもしれない。あいつはきつと少しでも救ってくれると思って俺に、電話をかけていきたくはな

ずだ。
俺は話してくれた友人の前で泣き崩れた。もう俺は、小倉を救える可能性があったのにも関わらず、救えなかった、救わなかった後悔で押しつぶされそうだった。俺は、その日、早退した。

こんなに人を殺したくなかったことはない。それもまさか、親友のあいつに対して。

何が「頑張れ」だ……。「気にすんな」だ……。「まだ公立受験があるだろ？」だ……。自分が受かったからって調子に乗りやがって……。俺がどれだけこの受験にかけていたかも知らないくせに……。これじゃ公立受験なんて、絶対に受かるわけない。あいつもそれを分かって話しかけてきやがったんだ……。殺してやる……。絶対に殺してやる……。

そうだ、今から呼び出してやろう。どうせ今頃のんきに公立受験の勉強でもしてるんだらう。

「もしもし？なんだ、小倉かよ。どうしたの？」

「あのさ、ちよつと時間ある？」

「ん？まあ、ちよつとならな」

「じゃあ、近くの公園にちよつと来てくれない？」

「なんで？」

「いや、ちよつと話したい事があってさ」

通夜が開かれた。それも終わって、深夜、会場にはライトと沢山の花々に照らされた、満面の笑みの40代ぐらいの男性の遺影が残されている。

それを前にして二人の男が最前列に座っている。一人は遺影として飾られている本人、渡部。もう一人は喪服を着用している青年。だが、この青年、渡部の親戚でも何でもなかった。

青年「あれですね……なんか死んじゃいましたね」

渡部「なに、若干笑ってんだよ」

青年「笑ってないですよ」

渡部「確かに、まあ、死んじまったな……」

青年「あんなに生きようと頑張ってたんですけどねえ」

渡部「ああ……。でも、頑張ってる間も『もうだめかも』とか思ってたんだよな。死んでみて分かったよ」

青年「新鮮でしょ？死ぬって」

渡部「そりゃあ、何回も死んでるわけじゃねえし？新鮮だけだよ……」

……

青年「もう少し生きたかった？」

渡部「……うん……。まあ、だって、あんなに泣かれたら、そう思っちまうよ」

青年「あんなに反発していた娘さんが、一番悲しそうだったですもんね」

渡部「ほんとさあ……。ああ……。もう……。……。死んでも、泣いてでるんだな……」

青年「娘さん、後ろにいますよ」

二人、後方で俯いて座っている渡部の娘を見る。

青年「泣いてますね」

渡部「ああ……こんな……ぐしゃぐしゃに泣いてる姿、アイツに見せられねえよ」

青年「見えませんよ。あなた死んでるんですから」

渡部「うるせえ……」

青年「……」

渡部「……」

青年「……」

渡部「……」

青年「落ち着きました？」

渡部「ああ……ありがとう……」

青年「僕が、どう死んだか話しましょうか？」

渡部「お！ちよつと、話してくれよ」

青年「そんなに、人がどう死んだか知りたいんですか……それだから、嫁さんにも逃げられちゃうんですよ」

渡部「お前が『話しましょうか？』言ってきたんだろ！それに、嫁も通夜には来てくれたから、いいんだよ！」

青年「では、お話ししましょう。そんな長いこと話すことじゃないんで、手短かに」

渡部「おう」

青年「脳の血管が切れて死にました」

渡部「へえー」

青年「……」

渡部「……」

青年「……」

渡部「え？終わり？だいたい気付いてたけどさ……。漫才やってるわけじゃねえんだから、所々ボケるのやめろ」

青年「まあ、そんな面白い話じゃないんですけどね」

渡部「いいから、話してみるよ」

青年「ちよつと、まあ、本当に些細な事なんですけど……僕の好きなバンドを馬鹿にされましてね」

渡部「ほうほう」

青年「なんと『お前が言ったあのバンド、ただのパクリじゃん』
って言いやがりました……」

渡部「それで、ブチ切れて……」

青年「そうです。『パクリかどうかなんてお前ごときに分かんのか
よ!』って胸倉掴んで、怒鳴ってやりましたよ」

渡部「まあ、そりゃそうだな」

青年「でも、その台詞を言っている途中に脳の血管がブツチーンと
……」

渡部「うわぁ……」

青年「もう、凄くキレてましたから、とんでもない形相と、胸倉掴
んだポーズのまま倒れて……」

渡部「……」

青年「なんか、ガッツポーズしてめっちゃ喜んでる死体みたいにな
っちゃっています……」

渡部「よっしゃー!……って感じ?」

青年「そうそう」

渡部「あのだ」

青年「はい?」

渡部「凄い、マヌケだよな。その死に方」

青年「そんなこと言うから、息子さんの結婚式に間に合わず、死ん
じゃうんですよ」

渡部「……」

青年「すみません」

渡部「いや、いいよ……娘の結婚式には間に合ったし……」

青年「病気になる前でしたもんね」

渡部「つてか、お前、何者なんだよ!」

青年「このタイミングで聞いちゃいます?遅すぎやしません?」

渡部「いいんだよ、言え!」

青年「強引ですねえ。そんなんだから、親戚の親父さんに……」

渡部「わかったよ！わかった！もう聞かないから喋るな！」

青年「……言いましようか？」

渡部「なんだよ、言ってくれんのかよ」

青年「僕、実は死者を地獄につれていく役人なんですよ」

渡部「え！マジかよ！地獄って、やっぱりあんのかよ！」

青年「そこに驚くんですね」

渡部「じゃあ、俺連れて行かれんの？」

青年「そうですね」

渡部「ええ〜！やっぱり地獄より天国の方がいいよ〜」

青年「天国はありませんよ」

渡部「は？ねえの？天国」

青年「はい」

渡部「なんで？」

青年「天国なんて主観でしかないじゃないですか。その人がその場所を『天国』って考えるか考えないかですよ」

渡部「いや……それなら地獄だって同じ事が言えるだろ」

青年「そうですね」

渡部「ん？」

青年「地獄だって天国って考えることもできるんです。案外楽しいかもしれないよ？地獄も」

渡部「そう……かなあ〜」

青年「生きている間、ずっと辛かったわけでもないでしょ？」

渡部「確かに」

青年「地獄も辛い事ばかりじゃないですよ」

渡部「……」

青年「そろそろ行きましょう。自分の体が焼かれて骨になるのは見たくないでしょ？」

渡部「いや、少し興味ある」

青年「え〜……」

渡部「引くなよ！でも、まあ、そろそろ行こうかな。あ、地獄じゃ

ねえぞ？」

青年「何ですか。行きましようよ地獄へ」

渡部「ちよつとは考えさせてくれよ。あと、その前に……」

渡部、後ろの娘の前に屈んで、頭をなでる。

渡部「今まで迷惑かけてごめん……。色々あったけど楽しかったぞ。お前が生まれてきてほんとによかった。俺が言うのもなんだけど、母さんの事も、大事にしてやれ。それで、どんなに辛い事があってもくじけんな。死のうなんて思うじゃねえぞ？お前はいつでも俺の娘であって、幸せに暮らす権利があるんだ……。って、聞こえてねえか」

青年「……聞こえずとも伝わってると思いますよ」

渡部「そうかな……。ああ……。なんか泣けてきた……」

青年「場所を変えてもう少し話しましょう」

渡部「そうだな……。ああ……。ちよつと泣かしてくれ」

青年「またですかあ？」

渡部と青年は、そのまま会場から立ち去って行った。

社会のゴミ判定法

- 1 ・税金を払わない奴
- 2 ・働かない奴
- 3 ・髪を染めてる奴
- 4 ・年寄り
- 5 ・内閣総理大臣に、なんか色々と言おう奴

そう記した紙を、細田首相は秘書に突きつけた。明日から「社会のゴミ判定法」として実施されるそうだ。ニヤニヤとニヒルな笑みを浮かべている細田首相の前で、秘書はその紙をただじっと、表情を凍らせたまま見つめていた。

「急ですな」

秘書は言った。戸惑いのかけらもない、いつもの冷静な口調だった。そんな秘書に対して細田首相は多少ながら嫌悪感を抱いた。

細田首相は美人で仕事も完璧にこなす秘書に対して、絶対の信頼を寄せていたが、彼女の「違う一面」も見たかった。いつも機械のように、テキパキと物事を進めて行く秘書の「戸惑った表情」が見てみたかった。

だが、秘書は涼しい顔をしている。いや、もはや絶対零度のごとく、冷たかった。

「社会のゴミと判定されたものはどうなるんですか？」

秘書は不機嫌そうな細田首相に問うた。そんな秘書の質問に細田首相は、ぶっきらぼうに答えた。

「ゴミに人権はない。死体になるか家畜になるか。まあ、どっちでもいいだろう」

秘書と細田首相の間に沈黙が流れる。細田首相は秘書に部屋から出て行ってほしかった。こういう沈黙は細田首相は嫌いだ。何も言わないなら出て行ってほしい。俺に発言を求めるな。

そんなことを思っていたが、結局沈黙を打ち破ったのは細田首相だった。彼はある疑問を抱いたのだ。

「お前ともあるうモンが、この法律の実施日も忘れていたのか？ 前からこの話はあつただろ？」

早口で細田首相は秘書に質問したが、徐に腕時計をみて、まるで聞こえていないかの様子。

「おい！ 聞いているのか！」

そんな細田首相の強い口調に重なるかのように、「もうすぐ0時を過ぎますね」という秘書の声が首相官邸の一室に響いた。

「だからどうした」

細田首相は怒りに震えていた。自分が無視されたことが、猛烈に腹立たしかった。だがそんな細田首相に眼も暮れず、秘書は口を開いた。

「今日は法案が実施される日です。この日を国民は楽しみにまっています」

ここで細田首相は秘書の様子がおかしいことに気付いた。自分とは対照的に歓喜に満ちてる。こんな秘書を見たのは初めてだ。細田首相は念願の「違う一面」を見る事が出来た。が、よろこんでいたのもつかの間、秘書の一言で凍りつかされた。

「ゴミはあんただ」

低く、鼓膜だけでは収まりきらず、脳まで震わせるほどの声だった。そう感じたのは「恐怖」からなのだろう。「なんと言った？」と聞こうと震えた唇を開けようとする、秘書がさえぎった。

「税金は払わない、自分では働かない、白髪を気にして髪をそめている、年寄り、かろうじて内閣総理大臣というあなたは、5番目の項目には当てはまりません。しかし、この法案は、すべてに当てはまった人間に判定がつくわけではなく、一つでも当てはまった人間に判定がつくのです。もう一度いいましよう。あなたはゴミです」

カチャリと冷たい音が響いた。額に冷酷な感覚がひろがる。細田首相の額には秘書がつきつけた拳銃が光ってる。

官邸に銃声が響く。それと同時に官邸の外で大歓声がおこった。それは「独裁政権」の終了を告げる歓喜の声たちだった。

こんにちほも言わない

庭掃除をしている老人が一人。自分の家の前を通り過ぎようとする若者に声をかけた。

「こんにちほ」

真昼の太陽の明るさに相応な笑顔で、若者に挨拶をした。だが、そんな老人に眼もくれず、素通りしていった。もちろん、老人は不快な気持ちになった。

ここ数日続いた雨。久々に天気の良い日がきたので、庭掃除をしていた。天気が良い日は心が晴れやかになる。しかし、そんな晴れやかな気分は若者の反応によって、打ち消された。

「最近の若者は……」とぐちぐちと言いつ出した。最近の若者は挨拶ができない。たった五文字の「こんにちほ」さえ、ろくに言えない。いや、若者に限ったことではない。挨拶はいかに大事かということに対する考えが、現代日本人は薄れている。近所付き合いの大切さも、わかっていない。「こんにちほ」は人と人との「今日も元気に過ごしましょうね」と、近所の人との交流を穏やかに行う働きがあるはずだ。

そんな事を一人呟いていると、ふと、自分の妻のことを思い出した。

こうした自分の愚痴にいつも妻は付き合ってくれた。反論する事もなく「はいはい」と柔らかい物腰で受け止めてくれた。今はない。なぜなら三年前に他界したからだ。

三年もたったが、やはり四十年以上共に過ごした記憶には勝てず、妻を忘れられないでいる。もう「おはよう」「やおやすみ」と言っても返してくれる人はいない。自分の話を聞いてくれる人はいない。

ぼーっと耽っていると、また一人家の前を通り過ぎようとした。女性だった。さっきの若者より二十歳ぐらい年が離れていそうな人だった。老人は衝動的に女性に挨拶をした。

「こんにちは」

女性はさっきの若者と同じように素通りした。まったく返事もせず、あきらかに無視していた。老人はもう何も言わず、庭掃除を終えて、家の中へ戻った。

散らかった薄暗い部屋。妻の遺影も埃を被っている。老人は遺影に近づき、埃をはらった。そのとき、遺影に反射した光が、老人の後方を映し出した。

老人の後ろにあったのは、うつぶせになって倒れている自分と同じ年ぐらいの男。いや、それは「自分」そのものだった。

老人は思い出したかのように呟いた。

「そっだ……死んでいたんだ……」

もう「こんにちは」と言っても返してくれる人はいない。

老人は妻の遺影の埃をはらって、立て直した。

猫鍋

有名な写真家である池辺。彼が立ち挙げているブログに「猫鍋」というタイトルで一つの写真が貼り付けられた。

これが原因で、一時ブログが炎上する事態に陥った。後にファンの中で「猫鍋事件」と呼ばれるこの件についてしばらく書くことと思う。

一般的に知られている「猫鍋」というものは、土鍋などに愛らしい猫が、なんとも気持ちよさそうに寝ていたり、入っていたりするものである。熱狂的な「猫愛好家」たちを卒倒させるほどの破壊力を持つそれを「猫鍋」と呼ぶ。

そして写真家の池辺。彼についても説明しておく。年間一億円以上かせぐ写真家である。彼はよく「日常に潜む不安を写し出す」と評価されている。彼の撮る写真は、見る人によっては、とてつもない「不安」を感じるだろう。風景を撮ることは殆どなく、人間の表情や行動を撮っている。

「いかれてる」「狂ってる」などは、もはや彼に対しての「褒め言葉」として通っている。

そんな彼がブログに貼り付けた写真。タイトルは「猫鍋」である。きつとファンの人々は「猫が鍋の中で寝ている」といった様子を頭に思い浮かべただろう。

しかし、URLを開いて見ると、そこに猫はおらず、あるのは鍋と、鍋の中に入っている肌色の「何か」である。

だれもがその写真を見て、口をそろえて「は？」と言ったことだろう。だが、すぐにある、恐ろしい考えが頭をよぎる。

鍋の中に入っているもの。ぎっしりと敷き詰められたそれは、ぶつ切りにされていれられている。肌色でヒダがある。まるで臓器のよう。

「まさか……これが、猫なんじゃないか？」

変わり果てた猫の姿。それが、この鍋のなかに詰められているのか。それが、この写真に写し出されているのか。

だとすれば大問題だ。猫を殺して、皮を剥いで、肉をそぎ落とし、血を抜き、鍋につめて、「猫鍋」と題して写真をとっている。

この考えに至ったファンの人々の中で、嘔吐した人も少なくはなかった。しかも、タチの悪い事に、その写真をあちこちにばら撒くことが頻繁に起こった。

たちまち話は、ネットのたおやかな流れによって流れていき、写真は多くの人々の目に止まり、内臓や脳を刺激して行った。

ブログはメラメラと炎上。マスコミにも取り上げられ、ワイドショーにはモザイクで例の写真が映し出され、週刊誌には、記者たちの筆が火花を散らして駆け回る。

彼らの勢いは本人にまで及んだ。本人というのは勿論、池辺のことである。

「あの写真は、いったん何なんですか？」

自宅から出てきた池辺に対して直撃取材。マイクを向けて尋ねられた池辺は、大して戸惑う様子もなく、一言笑顔で言い放った。

「あれは、一つのパフォーマンスですよ」

マイクを向けた女性が「パフォーマンスとは？」と、素早く尋ねた。池辺はいったん唾を飲み込んで話した。

内容はこうだ。「猫鍋」というワードは結構普及している。聞けば多くの人が、あの思わず頬が緩んでしまうような光景を想像するだろう。しかし、この池辺が撮る「猫鍋」は違う。誰もが予想だにしない写真を撮り続けるのが自分の仕事である。

まったく、とんでもないパフォーマンスである。これが年間一億円以上かせぐ写真家なのだろうか。マイクを向けた女性は思った。

「じゃあ、あれは猫の変わり果てた姿ではないんですね？」

女性の質問に、池辺は高らかに笑った。「そんなわけないじゃないですか」「そんな可愛そうなことしませんよ」と腹を抱えている。馬鹿にされたような気分になり、不快に思いながらも、女性

は次の質問に移った。個人的な思惑も含まれているが、これが彼女の一番聞きたかったことである。

「じゃあ、あの鍋の中に入っていたのは何ですか？」

池辺は途端に笑うのをやめて、真顔になって彼女を見据えた。空気が一瞬凍りついたように、彼を取り巻く人々は感じたことだろう。開かれた口からは、まるで当たり前かのように、異様な答えが出てきた。

「人間だよ」

心の論争

ある日の休み時間、俺の通っている中学で「腕相撲大会」が開かれた。約20人で行われたこの大会で、俺は決勝まで上り詰めた。

最所は興味が無かったが、誘われて断われない口下手な俺は嫌々参加する事になってしまったのだ。口下手で目立つ事が嫌いな俺にとって決勝まで上り詰めてしまうことは誤算だった。あの時わざと負けていればこんなことにはならなかったはずだ。密かに持っていた負けず嫌いな心がここで災いしてしまい俺はそうしてとても後悔していた。

「はあ……」

深く溜息を吐くと俺の目の前に決勝の相手が現れた。彼は向かいあった机の席に座り、腕相撲の机に肘をつけて構える姿勢をとると、口もただけの笑みを浮かべた。それを見て、俺も構え、彼の手を握った。

決勝の相手、名前を「向井良治」という。彼は学年で一番のイケメンでありながら、学年で一番の成績を持っている。それに人望も篤く、人気者。しかも俺と性格が正反対で、とても面白く優しくかった。

はたして俺はこのまま彼を倒してもいいのだろうか。俺は考えた。「レディー……ファイト！」

審判役の生徒が、握りあった俺と向井の手を覆っていた手を離すと同時に叫んだ。

さあ、試合の幕がきつておとされた。向井は始めから全力で俺の腕を左に倒してきた、突然入った力に危うく負けてしまうところだったが、机ギリギリの所で力をこめ、彼の攻撃を止め、押し返した。「くっ……」

全力をこめているのか、顔を歪め、押し返す力をまた返そうとするが、彼の力では俺の腕はビクともしない。このままいけば絶対的

に勝てる俺は確信した。

だが俺はここで考えた。

『さてよ？俺がここで勝ったら、少し変な空気にもなりかねないぞ？どうせみんなは向井が勝つ事を確信しているだろうし、ここで予想外なおきたら絶対、変な空気になる……』

そう心の中で呟いた俺は、力を弱めた。すると、まっぴり言わんばかりに、向井は力を入れて腕をたおしてきた。「ヤバイ！」そう思うと、ここで俺が憎んでいた「負けず嫌いな心」が発動し、間一髪、負けは免れた。俺は考えた。

『ここで俺が勝ったら人気者にもなれるんじゃないか？いやいや、それはない。しかし、あれだ。ちよつと評判がよくなるかもしれない。うまいこといったら不良に嘗められず、カツアゲされることもなくなるかもしれない』

ニヤニヤと妄想を膨らまし終えた俺は、攻めの体勢に入った。ゆつくりと向井を負けに誘いこんで行く。「よし！」勝利を確信した俺。だが突如、俺の耳にクラスの女子の声が入ってきた。

「向井君！頑張つて！」

祈るように掌を組んで向井を応援する彼女の名前は「日野輪静香」といって、学年でも一二を争う美貌の持ち主。先輩後輩、もちろん同級生にも多く告白され、それ全てを断わってきたガードの固い「鉄壁の女神」と俺は評価している。

そんな彼女の言葉が俺の考えを変えた。

『ちよつとまで。ちよつとまでよ。この場合、ヒーローものの特撮で考えれば……日野輪はヒロイン、向井はヒーロー、俺は怪人……あ、これは負けるしかないな。そう考えれば負けるしかない。うん、負けるしかない。というか負けなければならぬ』

一人心中で納得した俺は力を弱めた。

『いや、まで。違う考えかたを試みよう……。あ、もうどうでもよくなってきた。勝とう。勝つてやる』

俺は弱めた力をもとに戻し、今度は力を強めた。

『だめだ。どうでもよくない。ここで勝ってしまうと日野輪が傷つくかもしれない』

なぜなら俺は日野輪が向井に惚れている、惚れていることを知っていたからだ。憧れの人物が目の前で負けるのはどんな勝負であるうが嬉しくはないはず。俺は力を弱めた。

「キーンコーンカーンコーン」

瞬間、休み時間のチャイムが鳴った。

「なんだよ、もう終わりかよ」

「結局決着つかなかったじゃん」

「おもしろくねーな」

みな口々に言っただけで席に戻った。日野輪も同様。結局俺の心の論争は無意味だったのだ。

「あの・・・もう終わったんだし、離してくれよ」

「あつ、ごめん・・・」

俺は迷惑そうに向井に言われ、慌てて腕相撲の体勢を解いた。

こたつ

さあ、新年早々えらいことが起こった。これから「あけましておめでとう」だの「これからもよろしく」だのと挨拶しに友達がこの家にやってくる。なんで、これが「えらいこと」なのか。理由はこたつだ。

季節はまだ冬だ。日本各地方の気温が、ほとんど一桁になる時期だ。するとどうなるか。来る人間は、俺のところにある「こたつ」に入りたがる。「寒い寒い」とか言いながら入ってきやがる。

昔の俺は「おう、入れ入れ」と気前よく入れてやったが、そうはいかない。なんせ、この「こたつ」の中には妻の死体が入ってるのだ。

昨日の話した。結婚三周年を向かえた俺と、まだ活気よく生きていた妻は、上機嫌だった。しかし、それぞれ何に対しての「上機嫌」かは違っていた。

俺はもちろん「結婚三周年」に対して。そして妻は「新しく出来た男とのデート」だった。

妻が帰ってきて早々、怒鳴り散らして暴れ回って、気付いたら妻は頭から血を流して死んでいた。投げた灰皿がクリーンヒットしたんだろう。俺は焦った。「こんなつもりじゃ……」「殺すつもりじやなかった」というヘタレ野郎丸出しな言い訳が頭をめぐる。

部屋には俺と妻（死体）の二人。「なんとかバレないようにしないと」と考えていると、電話が鳴った。心臓が止まるかと思っただ。いつそ止まってくれたら、無理心中として扱われて、罪にはとわれないだろう。なんて馬鹿な事を考えながら、電話を取った。

「年賀状出すのめんどくさいから、行ってそのまんま、挨拶するからいいだろ？」

何気に訳わからん。だが一応伝わった。年賀状はとにかく出さない。こいつは直々に挨拶しに来るのか。「こいつ」というのは俺の旧友の亀田という男だ。毎年こうやって電話をかけてきて、家にやってくるが、今回ばかりは声を大にして「年賀状書けよ！家来んなよ！」と言いたかった。

まあ、亀田という男は自分の言い分が終わればブチツと電話を切ってしまう、とんでもなく自分勝手な男だ。言える間もない。

結局来ることになってしまった。亀田の来宅を阻止できなかった俺は、妻（死体）を「こたつ」の中に入れた。一時的に隠すためだ。また、後で処分方法を考えよう。

しかし、それから一日が経った。「後で処分方法を考えよう」なんて馬鹿な考え、ありえなかった。考える暇がない。もうすぐあの「亀田」がやってくる。あの「亀田」が。アイツなら真つ先に「こたつ」に潜り込むだろう。潜った瞬間最期だ。アイツまで殺さなくちゃならない。

『ピンポーン』

腑抜けた音が、部屋に鳴り響いた。そいつは「ヤツが来た、急げ」と言ってるかのように、何度も鳴り響いた。

まったくイライラさせる。チャイムは一回でいい。毎年言ってる。玄関を開ける。

「いやあ、寒い寒い」

「おい」

「ん？なんだ？あ、そうだ。あけまして」

「待て」

「なんだよ」

「一つ聞いていいか？」

「なんだよ、聞け聞け。どんとこいや」

「寒いかな？」

「……は？寒いに決まってるだろうがよ」

「じゃあ絶対に、こた」

「俺からもいいかな？」

「は？」

「一つ……」

「……ああ……いいけど」

「俺たち友達だよな？」

さあ、新年早々えらいことが起こった。亀田が死体を持ってきた。奥さんの死体だ。まったく、新年に妻と二人でわざわざ挨拶しにきやがって……。律儀なもんだ。

「じゃあ、さ。こたつ入れよ。奥さんと」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4423r/>

SHORT CUT MIX

2012年1月9日05時46分発行